

日本紀標註

卷之十六

和書門			
四三七八	函	架	冊
二六	冊	架	冊

內閣文庫		
四三七八	函	冊
二六	冊	架
(六十)		

內閣文庫	
番號	和 43718
冊數	26 ( 16 )
函號	137 99



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



日本紀略卷之十六

其間在位諸法

後醍醐天皇

其間在位諸法

其間在位諸法

其間在位諸法

其間在位諸法

其間在位諸法

其間在位諸法

原本卷首十日  
 本書紀卷第十  
 九とつを○天  
 國排開廣庭天  
 皇不惣て終た  
 るふて、眞の御

名を傳はらず、繼  
 體紀ふ、開此云  
 波羅爾の訓注  
 けれど、法王帝  
 説ふ、阿米久爾  
 意斯波留支比  
 里爾波乃彌巴  
 等ふ作是記ふ  
 也押波流岐ふ  
 作より、開をハ  
 ラニと訓る義  
 也、知らたけ也

日本紀標注卷之十六

敷田年治謹注

欽明天皇

天國排開廣庭天皇  
 嫡子也、母曰手白香皇后、天皇愛  
 之常置左右、天皇幼時夢有久云  
 天皇寵愛秦大津父者、及壯大必  
 有天下、寐驚遣使普求、得自山背

○日本紀標注卷之十六

○一

ど、此紀ふても  
警、排開とよむ  
べし、此天皇を  
後、欽明と謚  
奉りり○男大  
迹天皇も、繼體  
天皇あり○左、右を真床あり○云、中を延、云、るみて、祝詞宣命等、多きり○  
秦、大津父、雄略紀、秦、造、下、注せり○深草、和名抄、小同、同、郡、郷、名、深草、不加、久  
佐、類、聚、国、史、七、十九、禁、葬、山、城、国、紀、伊、郡、深、草、山、  
西、面、縁、近、京、城、也○無、を、為、し、事、も、無、と、多、り  
商、價、も、商、と、云、  
が、本、語、あ、る、を、  
ト、あ、ひ、賄、あ、ひ  
の、例、ふ、て、ナ、ヒ  
て、ふ、辞、の、か、た  
多、あり○二、狼、  
和、名、抄、小、狼、一  
名、豺、於、保、加、美

國、紀、伊、郡、深、草、里、姓、字、果、如、所、夢  
於、是、所、喜、遍、身、歎、未、曾、夢、乃、告、之  
曰、汝、有、何、事、答、云、無、也  
但、臣、向、伊、勢、商、價、來、還、山、逢、二、狼  
相、鬪、汚、血、乃、下、馬、洗、漱、口、手、祈、請  
曰、汝、是、貴、神、而、樂、麤、行、儻、逢、獵、士  
見、禽、尤、速、乃、抑、止、相、鬪、拭、洗、血、毛

と注せり、即、大  
神、あり○貴、神、  
下、小、膳、臣、巴、提  
便、が、虎、小、汝、威  
神、と、云、神、代、紀  
小、素、戔、鳴、尊、大  
蛇、小、汝、是、可、畏  
之、神、と、詔、ひ、今

昔、物、語、廿、四、宇、治、拾、遺、二、枕、冊、子、九、古、事、談、二、大、鏡、一、源、平、盛、衰、記、十、小、狐、を、式、神  
と、云、と、惣、て、神、と、を、靈、く、威、き、意、ふ、れ、を、狼、を、大、神、と、云、と、云、と、尤、速、仁、賢、紀、小、尤、  
切、を、ケ、ヤ、シ、ク、シ、テ、と、よ、み、源、氏、藤、裏、葉、及、胡、蝶、小、ケ、ヤ、ケ、ウ、と、云、語、り、り、抄、小、右、  
字、を、引、當、り、り○全、命、惣、て、イ、ケ、テ、と、語、を、イ、ケ、イ、ク、ル、と、活、キ、て、生、し、む、る、ふ、云、て、  
生、む、生、と、差、別、り、り、生、贄、生、捕、生、剥、ふ、と、准、ま、は、べ、し○此、報、案、小、報、應、ふ、と、云、と、  
佛、よ、り、起、り、と、思、ふ、め、る、と、非、あり、神、代、紀、小、第、一、海、濱、低、何、愁、吟、時、有、川、馬、嬰、  
羅、困、厄、即、起、憐、心、解、而、放、去、須、臾、有、塩、土、老、翁、來、云、々、是、川、馬、の、報、ふ、て、危、を、遁、  
路、へ、と、う、も、む、お、の、づ、ら、の、報、を、古、も、今、も、何、あ、れ、を、被、佛、作、虚、妄、説、と、一、ふ  
本、思、ひ、混、と、○大、藏、省、清、寧、紀、小、見、を、り、  
○武、小、廣、國、押、盾、天、皇、と、宣、化、天、皇、を、申、  
○日本紀標注卷之十六  
○二

皇子とらるゑ、  
繼體天皇の皇  
子にて、先帝の  
ためふも、皇兄  
み坐マ○令そ  
宣ごちみて、コ  
子とそ、政ごち  
獨ごちみどふ  
かあじ○山田  
皇后も、仁賢天  
皇の皇女にて、  
安閑天皇の皇  
后あり○百揆  
字書み揆、度也  
と注せり、原本  
捺ふ誤り○  
敬老以下、待士  
以上、史記周本

皇子、天國排開廣庭、天皇、令群臣  
曰、余幼年淺識、未開政事、山田、皇  
后、明閑百揆、請就而決、山田、皇后  
怖謝曰、妾蒙恩寵、山海誰同、萬機  
之難、婦女安預、今皇子者、敬老慈  
少、禮下賢者、日中不食、以待士、加  
以幼而、穎脫早、擅嘉聲、性是寬和  
務存矜宥、請諸臣等、早令臨登位  
光臨天下、冬十二月、庚辰朔甲申、

紀の文あり○  
甲申五日○即  
天皇位、下原本  
時、年若干の四  
字、り、旁注不  
一本注と注せ  
り、集解、後人  
加入として、刪  
と、小從ふ○  
甲子十五日○  
箭田珠勝大兄  
皇子、記ふ八田  
王、不作と、り、箭  
田、和名抄、大  
和国添下郡の  
郷名、不て、式、不  
同郡、矢田、坐、久  
志、玉、比、古、神、社

天國排開廣庭皇子、即天皇位、尊  
皇后、曰、皇太后、大伴、金村、大連、物  
部、尾輿、大連、爲大連、及蘇我、稻目、  
宿禰、大臣、爲大臣、並如故  
元年春正月、庚戌朔甲子、有司請  
立皇后、詔曰、立正妃、武小廣國押  
盾、天皇女、石姬、爲皇后、是生二男  
一女、長曰、箭田珠勝大兄、皇子、仲  
曰、譯語、田、淳、中、倉、太、珠、敷、尊、少、曰

もりよむ、此地  
 小由り、御名  
 美称、大兄も  
 字の如し、○仲  
 中、舅あり、万  
 葉十四、小等能  
 乃、奈可知師登  
 我里須良思母  
 国十市郡の地名あり、○狭田毛、詳あり、○投化、賦役令の義解、猶歸化也、と  
 〇山村、和名抄、大和国添上郡郷名、山村也、未無良と注せり、今昔物語十  
 二、大和国添上郡、山村ノ山ニシテ、一ノ鹿有、云々、○山村、已知部姓氏録、大和  
 国諸蕃、山村忌寸、已智、同祖古禮公之後也、と云、氏人も日本後紀十二、右  
 兵衛大初位下、山村、曰、佐助、三代實録廿六、正六位上山村、曰、佐得道、と云、人  
 見ゆ、又姓氏録、大和国諸蕃、已智、秦太子胡亥之後也、と云、りて、此氏人史、小  
 も見たり、此已智と山村とを、一姓、合たるを、續紀廿九、山村許智、人足、同  
 世四、山村許智、大足等、四人賜姓、山村、忌寸と云、り、う、見を、爰、今、山村、已知  
 部と云、り、一氏を云、り、山村と已知部と、二氏を云、り、定、云、り、後人考、て

笠縫、皇女、更、名、狹田 二月、百濟人  
 已知部、投化、置、倭國、添上郡、山村、  
 今、山村、已知部之先也、三月、蝦夷  
 隼人、並率、衆、歸附

〇蝦夷隼人、も清  
 寧紀、不見、と云、り、  
 已丑、十三日、〇  
 磯城嶋、日本靈  
 異記、大和国  
 山邊郡、磯城嶋  
 村、と云、り、然、小  
 爰、磯城郡と  
 〇磯城郡、上郡  
 山邊郡、磯城嶋  
 郡、と傳、たり、も、  
 違、る、小、似、た、れ  
 〇然、らず、是、え  
 二郡の界あり  
 し、中、左、右  
 小、云、り、初、此地  
 名、を、大和の枕詞と、又歌道を、數嶋の道と云、る、と、此地、小、三十二年の間、御  
 世、知、食、し、ゆ、云、り、如此、云、り、へ、る、を、は、べ、し、冠、辞、考、小、崇、神、紀、小、三年、九月、遷、都、於

秋七月、丙子朔、己丑、遷都、倭國、磯  
 城郡、磯城嶋、仍號、爲、磯城嶋、金刺  
 宮、八月、高麗、百濟、新羅、任那、並遣  
 使、獻、並、脩、貢、職、召、集、秦人、漢人、等、  
 諸蕃、投化、者、安置、國郡、編、貫、戶籍、  
 秦人、戶數、惣、七千五百十三戶、以、大  
 藏、掾、爲、秦伴、造

磯城、是謂瑞籬宮、欽明紀云元年七月、遷都倭國磯城郡、仍號為磯城嶋金刺宮、  
 たりて、二代まがら殊、なりまの年おましまして、名高りれむ、まは項よりおのづ  
 りら、大和、国の一つの名の如く成ふりむ、仍て後ふおと所の都とありても、猶  
 やまゝいふおを冠らせて、よめるありむ、奈良朝とありても、既やまとのり  
 として、之、奇島能人者、和禮自欠ともよみたり云々、此説云々、れを異論と  
 し、○金刺宮と、地名を負たるう、大和志小城上郡金刺宮、在金屋村、西南初瀬川、  
 南と云、今按、小金屋村も、三輪社の直南に當り、山邊郡より遠、よをりらぬと、  
 其塚とも云、し猶考べし○戸籍も、既允恭紀に注せり○大藏掾、和名抄、  
 神祇曰、祐国曰、掾皆萬豆利古止比止と注せり、秦人の大藏省に關るふと、雄  
 略天皇十五年、紀、姓氏録を引て、委注しつ○秦伴造、按、秦造と、ふくて、伴と  
 しも、なりとも、一人に任、ひし、ひりら、ず、續紀十八、秦部飯麻呂、文德實録大  
 ふ、秦部、總成まどの、秦部も、姓氏録にも洩れれど、秦伴より起、は、あふべし  
 已卯五日 ○祝  
 津宮、天書、元  
 年九月、已卯、行  
 幸難波、庚辰、進  
 幸祝津宮、遣使  
 祠住、江、神、賜、民

九月乙亥朔己卯、幸難波、祝津宮、  
 大伴、大連、金村、許勢、臣、稻持、物部、  
 大連、尾輿、等、從焉、天皇問諸臣曰、

壽及帛各有差、  
 初將征新羅、按  
 小祝也、地名、  
 るべし、續紀十  
 八、攝津國住  
 吉郡、人祝、長月  
 等五十三人、賜  
 依羅、物忌、姓、  
 行々、志、小河邊  
 郡祝津宮、在西  
 難波村、今有八  
 幡小祠、古梅樹  
 一株、と記せり  
 ○許勢臣、姓氏  
 録、小巨勢朝臣、石川同氏、巨勢雄柄、宿禰之  
 後也、天武十三年、紀、小巨勢臣賜姓曰朝臣、  
 住吉宅、攝津志  
 住吉郡、條、小、大

幾許軍卒、伐得新羅、物部、大連、尾  
 輿、等、奏曰、少許軍卒、不可易征、曩  
 者、男大迹、天皇、六年、百濟遣使、表  
 請、任那、上、哆唎、下、哆唎、娑陀、牟婁  
 四縣、大伴、大連、金村、輒、依表、請、許  
 賜所求、由、是新羅、怨曠、積年、不可  
 輕爾而伐、  
 於是、大伴、金村、居住吉宅、稱疾、不

伴金村策古蹟  
在堺比莊高淵  
濱界○青海夫人  
人姓氏録小青  
海首雄根津彦  
命之後也夫人  
也妃次不て天  
武紀小夫人藤  
原大臣女氷上  
娘ともゆゑ後  
官職員令小夫  
人三員三位以  
上云々初夫人  
とも刀自小大  
を加たるふて刀自てふ活とも允恭紀小注しつ此夫人小も御子在るをしゆ  
と誰女し云傳を脱せり原本夫下人字を脱せり次小夫人とゆふよりて補  
ひつ○鞍馬天武紀の旁注小久良於微留年末とゆふと姑舊讀小從ふべし是  
を鞍をおさふより贈しゆと五饒馬ともゆふと江次第春日祭條小宮人等戲設

朝、天皇遣青海夫人勾子慰問  
懃大連怖謝曰臣所疾者非餘事  
也今諸臣等謂臣滅任那故恐怖  
不朝耳乃以鞍馬贈使厚相資敬  
青海夫人依實顯奏詔曰久竭忠  
誠莫恤衆口遂不為罪優寵彌深  
是年也大歲庚申

饒馬、馱為馬以  
達為雲珠とゆ

二年春三月納五妃元妃皇后弟

○稚綾姫皇  
女も宣化天皇

曰稚綾姫皇女是生石上皇子次

の御子ふて彼  
処ふも稚上小

有皇后弟曰日影皇女是生倉皇

倉字ゆゑ○石  
上皇子も大和

子次妃蘇我大臣稻目宿禰女曰

堅鹽媛  
堅鹽此云

堅鹽媛生七男六女其

名小由りる御  
名も姓も石

一曰大兄皇子是為橘豐日尊其

上朝臣ゆゑ  
御乳母の姓も

二曰磐隈皇女更名夢初侍祀於

影皇女も美稱  
あり原本細字

伊勢大神後坐好皇子茨城解

此曰皇后弟明是檜隈高田天皇女而列后妃之名不見母妃姓與皇女名字不知出何書後勘者知之と四十字の細字ゆゑ集解小私記攬入として削たる小

○日本紀標注卷之十六







の細字も親王且依一撰而注詳  
のみづらり述其異他皆效此

る所ふて通證ふ讀此紀者當為斷と云るが如し○參差を方違ふて比むとも  
とむ一方差と云意詩周南ふ參差荇菜とるもカタガヒとよみて大全小  
長短不齊之類と注せり○考震齊明紀不檢覆をよみ舒明紀日本靈異記等ふ  
探をよみ新撰字鏡ふ撒又靈をよみ字鏡集及諸字書ふ檢又括をよめ古今  
著聞集八ふ隠とたるふやとらふふもとむと云々榮花物語浦々別ふ  
關をかたぬふとしていとらたてりる世も大何ふとといひつくるもい  
とゆし云々類篇ふ考事而筆遺其辭得實曰敷と有り字典ふ覆詰串切音  
察とも有りとむ通をし書りや即穴探う探をサグリと云るサを發語あるべし  
○異と字の如し万葉ふ日ニ異ニま月ニ異ニまど  
書りるも借字ふぐり異みケの訓らるを見はべし

春日日抓臣記  
み春日日爪臣  
み作とをみ抓  
を原本本み作  
とほと誤ふて  
ツメと訓べし

次春日日抓臣女曰糠子生春日  
山田皇女與橘麻呂皇子夏四月  
安羅次早岐夷吞奚大不孫久取

類聚名義抄難  
字記等み抓み  
ツメの注有り  
神代紀み抓津  
姫命を式みと  
紀伊国名草郡  
都麻都比賣神  
社と記して同  
神ふるを知る  
べし仁賢紀ふ  
和珥臣日爪と  
云人も見ゆ然  
とど日抓てふ  
義をちらむ○  
春日山田皇女  
大和志添下郡  
み山田村有り  
○橘麻呂皇子

柔利加羅上首位古殿奚卒麻早  
岐散半奚早岐兒多羅下早岐夷  
他斯二岐早岐兒子他早岐等與  
任那日本府吉備臣闕名往赴百  
濟俱聽詔書百濟聖明王謂任那  
早岐等言日本天皇所詔者全以  
復建任那今用何策起建任那蓋  
各盡忠奉展聖懷任那早岐等對  
曰前再三廻與新羅議而無答報

の、橘も橘本推  
皇子、下云、る  
如し、○安羅  
を国名ふて、神

所、留、之、旨、夏、告、新、羅、尙、無、報、今、宜  
俱、遣、使、往、奏、天、皇、

功紀ふ注しつ、○次早岐も、新羅国の官名ふて、南史新羅傳ふ、其官名有子貴早  
支、壹早支、齊早支云々、梁書ふ、子貴早支、齊早支、謁早支と叙たり、何ふ、多れ、子  
貴早支の次あるを云、○夷吞奚、大不孫、久取柔利も、三人の名ふて、下、下早岐  
大不孫、久取柔利と見ゆとれを、次早支、下官も、夷吞奚一人ふて、次、下早岐  
あはべし、○加羅も国名ふて、垂仁紀ふ注せり、○上首位官名あり、○古殿奚も、  
人名、○卒麻も国名ふて、五年又廿三年、紀ふ見ゆたり、○散半奚も、国名ふて、下  
小散半下国と何、○多羅も国名ふて、神功紀ふ注せり、○下早岐も、諸早岐の  
尤下臘を云、○夷他も、人名あり、○斯二岐も国名ふて、下、下斯二岐国と見ゆ、又  
斯二岐君とも何、○子他も国名あり、二十三年、紀ふ、子他国とあり、以上任那の属国等あり

爰在大王之意  
の、爰を原本奚  
ふ誤とり、○間  
言も、否申あり、  
夫、建、任、那、者、爰、在、大、王、之、意、祇、承、  
教、旨、誰、敢、問、言、然、任、那、境、接、新、羅、

文選、褚淵碑文  
ふ、人無間言云  
々、後漢書、和帝  
紀ふ、孔子曰、吾  
無間然、注、ふ、間  
非也、○卓、淳、も  
国名ふて、神功  
紀ふ注せり、○  
禍も、神功紀の  
四十六年、り、  
四十九年、迄の、  
紀ふ見ゆたり、  
細守ふ等、謂、  
已吞加羅、言、卓  
淳等、国、有、敗、亡  
之、禍、の、十七、字  
も、後、人、の、加、た  
ま、と、見、ゆ、と、じ、

恐、致、卓、淳、等、禍、  
亡、之、聖、明、王、曰、昔、我、先、祖、速、古、王、  
貴、首、王、之、世、安、羅、加、羅、卓、淳、早、岐、  
等、初、遣、使、相、通、厚、結、親、好、以、爲、子、  
弟、冀、可、恒、隆、而、今、被、誑、新、羅、使、天、  
皇、忿、怒、而、任、那、憤、恨、寡、人、之、過、也、  
我、深、懲、悔、而、遣、下、部、中、佐、平、麻、鹵、  
城、方、甲、背、昧、奴、等、赴、加、羅、會、于、任、  
那、日、本、府、相、盟、以、後、繫、念、相、續、圖、

姑、原本不從ふ  
○速古王、貴首  
王、東国通鑑、  
速古王、百濟  
第五主、  
首王、第六主

建<sup>ハト</sup>任<sup>ラ</sup>那<sup>アサヨヒニ</sup>旦<sup>ヲ</sup>夕<sup>ヨヒニ</sup>無<sup>レ</sup>忘<sup>ル</sup>、今天<sup>ニ</sup>皇<sup>ノ</sup>詔<sup>ヲ</sup>稱<sup>シ</sup>速<sup>ニ</sup>  
建<sup>ヨ</sup>任<sup>ラ</sup>那<sup>ヲ</sup>由<sup>レ</sup>是<sup>ニ</sup>欲<sup>ク</sup>共<sup>ニ</sup>爾<sup>トモ</sup>曹<sup>トモ</sup>謨<sup>ハカリテ</sup>計<sup>ヲ</sup>樹<sup>ク</sup>立<sup>ス</sup>  
任<sup>ラ</sup>那<sup>ヲ</sup>國<sup>ヲ</sup>宜<sup>ク</sup>善<sup>ク</sup>圖<sup>ル</sup>之<sup>ヲ</sup>

あり、但、本、仇、首、王、不、作、神、功、紀、不、貴、須、不、作、  
○念、怒、を、原、本、念、怒、  
と、り、今、改、む、○下、部、中、北、史、百、濟、傳、  
都、下、有、方、分、為、五、分、曰、上、部、前、部、中、部、下、部  
後、部、と、り、中、下、部、不、属、  
○佐、平、ハ、一、品、官、  
平、掌、宣、納、事、内、頭、佐、平、掌、庫、藏、事、内、法、佐、平、掌、礼、儀、事、衛、士、佐、平、掌、宿、衛、兵、事、  
佐、平、掌、刑、獄、事、兵、官、佐、平、掌、外、兵、馬、事、  
○城、方、も、方、名、を、云、  
○甲、背、も、職、名、  
引、り、る、百、濟、本、紀、并、繼、體、十、年、紀、を、對、見、て、原、本、背、を、  
肖、不、作、と、は、  
○味、奴、も、名、  
又、於、任、那、境、徵、名、新、羅、問、聽、與、不、  
乃、俱、遣、使、奏、聞、天、皇、恭、承、示、教、儻

又、於、任、那、境、徵、名、新、羅、問、聽、與、不、  
乃、俱、遣、使、奏、聞、天、皇、恭、承、示、教、儻

咏、已、吞、繼、體、紀  
み、注、せ、り、原、本  
咏、已、答、み、誤、と  
?、今、改、む

叢、爾、文、選、謝、平  
原、内、史、表、  
爾、之、生、尚、不、足  
小、貌、と、注、し、同、  
養生、論、  
以、叢

如、使、人、未、還、之、際、新、羅、候、隙、侵、逼、  
任、那、我、當、往、救、不、足、為、憂、然、善、守、  
備、謹、警、無、忘、別、汝、所、導、恐、致、卓、淳、  
等、禍、非、新、羅、自、強、故、所、能、為、也、其、  
咏、已、吞、居、加、羅、與、新、羅、境、際、而、被、  
連、年、攻、敗、任、那、無、能、救、援、由、是、見、  
亡、其、南、加、羅、叢、爾、狹、小、不、能、卒、備、  
不、知、所、託、由、是、見、亡、其、卓、淳、上、下、  
携、貳、至、欲、自、附、内、應、新、羅、由、是、見、

爾之軀攻之、  
らるも劉良  
が小貌と注せ

前部も上も下  
部とらる処も  
併注しつ○奈  
率も百濟第六  
の官あり北史  
百濟傳も左平  
一品達率二品

亡、因<sup>レ</sup>斯<sup>ニ</sup>而觀<sup>ニ</sup>三國<sup>ノ</sup>之敗<sup>ラ</sup>、良<sup>ニ</sup>有<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>也、  
昔<sup>ハ</sup>新羅請<sup>テ</sup>援<sup>ニ</sup>於高麗<sup>ニ</sup>而、攻<sup>ニ</sup>擊<sup>ト</sup>任那<sup>ト</sup>、  
與<sup>ニ</sup>百濟<sup>ニ</sup>尚不<sup>レ</sup>剋<sup>カ</sup>之、新羅安<sup>ニ</sup>獨滅<sup>ニ</sup>任  
那<sup>ヲ</sup>乎、今寡<sup>レ</sup>人與<sup>レ</sup>汝<sup>、</sup>戮<sup>レ</sup>力<sup>ヲ</sup>并<sup>テ</sup>心<sup>ヲ</sup>翳<sup>ニ</sup>賴<sup>ニ</sup>  
天<sup>カ</sup>皇<sup>レ</sup>任那<sup>ハ</sup>必<sup>ク</sup>起<sup>ル</sup>、因<sup>テ</sup>贈<sup>ル</sup>物<sup>ヲ</sup>各<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>差<sup>、</sup>忻<sup>コ</sup>  
忻<sup>ビ</sup>而還<sup>、</sup>秋七月百濟聞<sup>テ</sup>安羅<sup>、</sup>日本<sup>、</sup>  
府<sup>ト</sup>與<sup>ニ</sup>新羅<sup>ニ</sup>通<sup>ニ</sup>計<sup>ヲ</sup>遣<sup>ニ</sup>前部<sup>、</sup>奈率<sup>、</sup>鼻利  
莫<sup>ク</sup>古<sup>、</sup>奈率<sup>、</sup>宣<sup>ニ</sup>文<sup>、</sup>中部<sup>、</sup>奈率<sup>、</sup>木<sup>、</sup>劼<sup>、</sup>昧<sup>、</sup>  
淳<sup>、</sup>紀<sup>、</sup>臣<sup>、</sup>奈率<sup>、</sup>彌<sup>、</sup>麻<sup>、</sup>沙<sup>、</sup>等<sup>、</sup>  
者<sup>、</sup>蓋<sup>シ</sup>是<sup>、</sup>紀<sup>、</sup>卒

恩率三品、德率  
四品、扞率五品、  
奈率六品と  
々、原本率を卒  
み作り、今改  
む○中部ハ上  
の下部ハ注せ  
々○木劼と昧  
淳と二人の名  
あり汝と繼體  
十年紀ハ見  
たり○紀臣奈  
率、是も紀氏の  
人、彼地も奈

臣娶<sup>ニ</sup>韓<sup>ノ</sup>婦<sup>ヲ</sup>所<sup>レ</sup>生<sup>、</sup>因<sup>テ</sup>留<sup>ニ</sup>百<sup>、</sup>濟<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>奈<sup>、</sup>使<sup>ニ</sup>  
卒<sup>ト</sup>者<sup>也</sup>、未<sup>レ</sup>詳<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>父<sup>、</sup>他<sup>ハ</sup>皆<sup>、</sup>效<sup>レ</sup>之<sup>也</sup>、  
于安羅<sup>ニ</sup>召<sup>ニ</sup>到<sup>、</sup>新羅<sup>、</sup>任那<sup>、</sup>執<sup>ニ</sup>事<sup>、</sup>謨<sup>、</sup>建<sup>、</sup>  
任那<sup>ヲ</sup>別<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>安羅<sup>、</sup>日本<sup>、</sup>府<sup>、</sup>河内<sup>、</sup>直<sup>、</sup>通<sup>、</sup>  
計<sup>ヲ</sup>新羅<sup>、</sup>深<sup>、</sup>責<sup>、</sup>罵<sup>、</sup>至<sup>、</sup>費<sup>、</sup>直<sup>、</sup>阿<sup>、</sup>賢<sup>、</sup>移<sup>、</sup>那<sup>、</sup>  
斯<sup>、</sup>佐<sup>、</sup>魯<sup>、</sup>乃<sup>、</sup>謂<sup>ニ</sup>任那<sup>、</sup>曰<sup>、</sup>昔<sup>、</sup>我<sup>、</sup>先<sup>、</sup>祖<sup>、</sup>速<sup>、</sup>  
古<sup>、</sup>王<sup>、</sup>貴<sup>、</sup>首<sup>、</sup>王<sup>、</sup>與<sup>ニ</sup>故<sup>、</sup>早<sup>、</sup>岐<sup>、</sup>等<sup>、</sup>始<sup>、</sup>約<sup>、</sup>和<sup>、</sup>  
親<sup>、</sup>式<sup>、</sup>爲<sup>ニ</sup>兄<sup>、</sup>弟<sup>、</sup>

率小任じたるう、又其子ふて父、姓を繼しむや、原本紀、臣以下、三十二字の細字  
あり、後人の所為ありと思へど、姑、原本も從ふ○加不至費直を、河内直あり、  
原本細字の末も、未詳也の三字あり  
ると、後人の加、たるあはれを削る

慨然、神武紀、  
于黎多乘舟夜  
と訓注、  
追悔無及、按、  
此時聖明、古  
人云々、云々、  
古人とて誰を  
指せる、若、  
撰者の私、加  
たる、  
地、下、と、  
べし、舊讀シタ  
ツクニ、  
是非、  
神代紀、黄泉、下  
み注、  
し、  
下十九字、

於是、我、以、汝、為、子、弟、汝、以、我、為、父  
兄、共、事、天、皇、俱、距、強、敵、安、國、全、家  
至、于、今、日、言、念、先、祖、與、舊、早、岐、和  
親、之、詞、有、如、咬、日、自、茲、以、降、勤、修  
隣、好、遂、敦、與、國、恩、踰、骨、肉、善、始、有  
終、寡、人、之、所、恒、願、未、審、何、緣、輕、用  
浮、辭、數、歲、之、間、慨、然、失、志、古、人、云、  
追、悔、無、及、此、之、謂、也、上、達、雲、際、下  
及、泉、中、誓、神、乎、今、改、咎、乎、昔、一、無、

志張昭傳の全  
文○堂構、書、大  
詰、若、考、作、室  
既、法、厥、子、乃  
弗、肯、堂、矧、肯、構、  
と云、を、故、事、  
取、ま、り、○所、折  
俗、語、云、と  
ど、字、鏡、集、運、歩  
色、葉、抄、等、小、折、  
を、よ、み、塵、添、壺  
囊、抄、五、小、折、字  
と、へ、ツ、ル、と、  
と、む、此、語、雅、俗  
小、通、  
字、書、小、折、夜、行  
所、擊、者、と、  
文、選、西、京、賦、小、

隱、匿、發、露、所、為、精、誠、通、靈、深、自、克  
責、亦、所、宜、取、蓋、聞、為、人、後、者、貴、能  
負、荷、先、軌、克、昌、堂、構、以、成、勲、業、也、  
故、今、追、崇、先、世、和、親、之、好、敬、順、天  
皇、詔、勅、之、詞、拔、取、新、羅、所、折、之、國、  
南、加、羅、喙、已、吞、等、還、屬、本、貫、遷、實  
任、那、求、作、父、兄、恒、朝、日、本、此、寡、人、  
之、所、食、不、甘、味、寢、不、安、席、悔、往、戒  
今、之、所、勞、想、也、夫、新、羅、甘、言、希、誑、

城尉不弛析云々、原本施析不誤れり○蜂蛇惟、爰小惟とらるらえ蜂蛇の戦いふてもりり乃七○妖祥、原本妖を妖小誤とせ

天下之所知也、汝等妄信、既墮人、權、方今任那、境接新羅、宜常設備、豈能弛析、爰恐、陷羅誣欺、網罟、喪國、亡家、為人繫虜、寡人念茲、勞想、而不能自安矣、竊聞、任那與新羅、運策席際、現蜂蛇、性亦衆所知、且夫妖祥、所以戒行、災異、所以悟人、當是明天告戒、先靈之徵表者也、禍至追悔、滅後思興、孰云及矣、今

資、寄所あり、万葉三子、山矣、耶今者、因香跡、思波牟、同十六、小、荒雄、良我、余、須可乃、山跡、云々

汝遵余聽、天皇勅、可立任那、何患不成、若欲長存、本土、永御舊、民其謨、在茲、可不慎也、聖明王、更謂任那、日本府曰、天皇詔、稱任那若滅、汝則無資、任那若興、汝則有援、今宜興建、任那、使如舊日、以爲汝助、撫養黎民、謹承詔、勅、悚懼、填膺、誓効、丹誠、冀隆任那、永事天皇、猶如往日、先慮未然、然後康樂、今日日本



話原本諾不作  
集解小謀小

府復能依詔、救助任那、是爲天皇  
所必褒讚、汝身所當賞祿、又日本、  
卿等久住任那之國、近接新羅之  
境、新羅情狀亦是所知、毒害任那、  
謨防日本、其來尚矣、匪唯今年、而  
不敢動者、近羞百濟、遠恐天皇、誘  
事朝廷、僞和任那、如斯感激任那、  
日本府者、以未禽任那之間、僞示  
伏從之狀、願今候其間隙、詰其不

改たり、通證不  
活板作詰し云、  
る小從ふ

備一舉兵而取之、天皇詔勅勸立  
南加羅、味已吞、非但數十年、而新  
羅一不聽命、亦卿所知、且夫信敬  
天皇爲立任那、豈若是乎、恐卿等  
輒信甘言、輕被謾語、滅任那國、奉  
辱天皇、卿其戒之、勿爲他欺  
三年、原本三年  
を脱せり、集解  
小補ひたる小  
從ふ○中部ト  
下部ト下小云ト  
○下韓、今朝鮮

全羅道み、然地  
りり、或書小  
云、○真牟貴  
文、名多り○  
護徳を、周徳ホ  
おあじきり東  
国通鑑、百濟官  
名第九等小、周  
徳りり、已州已  
婁を名○物部  
云、是も我人種、彼地小て物部を姓とせし、即上小見をたる、紀、臣小おあじり  
るべし○施徳も、百濟第八等の官あり○扶南、晋書四夷傳小、扶南、西去林邑、三  
千餘里在海、大湾中、其境廣袤三千里、有城邑宮室、人皆醜黑、拳髮、保身、跣行、性質  
直不為寇盜、以耕種為務、一歲種、三歲獲、又好雕文刻鏤、食器多以銀為之、貢賦以  
金銀珠香、亦有書紀、府庫、文字有類於胡、喪葬婚姻略同、林邑云々、猶梁書諸夷傳、  
唐書南蠻傳等小見をたる、大同少異、今爰略○奴二口も扶南人あり、原本奴  
を脱、旁注小、  
て補ふ○甲午

四年夏四月、百濟紀、臣、奈率彌麻  
沙等罷之、秋九月、百濟聖明王、遣  
前部奈率真牟貴文、護徳已州已  
婁、與物部施徳麻哿牟等、來獻扶  
南財物、與奴二口

冬十一月、丁亥朔甲午、遣津守連

八日○津守連、  
神功紀小見を  
たり○郡令を  
郡司を云、

詔、百濟曰、在任那之下韓、百濟郡  
令城主、宜附日本府、并持詔書、宣  
曰、爾屢構表稱、當建任那、十餘年

屋宇和名抄小  
字を、夜加須と  
注せり○河内  
直、上小見をた  
る、細字小河内  
直、已見上文の  
七字あり、後人  
の所為、今削る  
○内頭も、百濟  
第一等の官小

矣、表奏如此、尚未成之、且夫任那  
者為爾國之棟梁、如折棟梁、誰成  
屋宇、朕念在茲、爾須早建、汝若早  
建、任那、河内、直等、自當止退、豈足  
云乎、是日聖明王、聞宣勅已、歷問  
三、佐平内頭及諸臣曰、詔勅如是、

て東国通鑑ハ、  
内頭佐平、掌庫  
藏事と有り。○  
三佐平次ハ、上  
中下と有り。是  
あり。

上佐平、北史百  
濟傳ハ佐平五  
人としてを貫  
首を上とし、中  
下推べし。○德  
率ハ第四等の  
官ハ、北史百  
濟傳ハ、德率四  
品と有り。

當復何如、三佐平等答曰、在下韓  
之我郡、令城主不可出之、建國之  
事、宜早聽聖勅、十二月百濟聖明  
王、復以前詔、普示群臣曰、天皇詔  
勅如是、當復何如、上佐平沙宅已  
婁、中佐平木笏麻那、下佐平木尹  
貴、德率鼻利莫古、德率東城道天、  
德率木笏味淳、德率國雖多、奈率  
燕比善那等、同議曰、臣等稟性愚

闇、都無智略、詔建任那、早須奉勅、  
今宜召任那、執事國國、早岐等、俱  
謀同計、批表述志、又河内直移那  
斯麻都等、猶住安羅任那、恐難建  
之故、亦并表乞移本處也、聖明王  
曰、群臣所議甚稱寡人之心、是月  
乃遣施德高、分召任那、執事與日  
本府執事、俱答言、過正旦而往聽  
焉。

施德、北史百濟  
傳ハ、施德八品  
と有り。

五年春正月、百濟國遣使召任那、  
執事與日本府、執事俱答言祭神、  
時到祭了而往、是月百濟復遣使、  
召任那、執事與日本府、執事、日本  
府任那、俱不遣執事而遣微者、由  
是百濟不得俱謀建任那國、二月  
百濟遣施德馬武、施德高分屋、施  
德斯那奴次酒等使于任那、謂曰  
本府與任那、早岐等曰我遣紀臣

己麻奴跪、此名  
我、傳、えら、ざ  
るを、彼本紀を  
引て示、乃此紀  
の例あり、原本  
ふ而語訛不正  
未詳の細字は  
後人の攙入

奈率彌麻沙、奈率已連、物部連奈  
率用歌多朝謁天皇、彌麻沙等還  
自日本、以詔書宣曰、汝等宜共在  
彼日本府、早建良圖、副朕所望、爾  
其戒之、勿被他誑、又津守連從曰  
本來、百濟本紀云、津宣詔勅而問、  
任那之政、故將欲共日本府、任那、  
執事、議定任那之政、奉奏天皇、遣  
召三迴、尚不來到、由是不得共論

今削る

百濟本紀、下原本而語訛未詳其正也、と、八字の細字有り、後人の所為例ニ依りて削る○鷹

圖計任那之政奉奏天皇矣、今欲請留津守連、別以疾使具申情狀、遣奏天皇、當以三月十日發遣使於日本、此使便到、天皇必須問汝、汝日本府卿任那、早岐等、各宜發使共我使人往聽、天皇所宣之詔、別謂河内直、直百濟本紀云、河内自昔迄今、唯聞汝惡、汝先祖等、云、汝先那干陀、甲背、鷹、亦云、那歌陀、甲背、鷹、歌、岐、弥、

歌岐弥、下、原本語訛未詳の四字有り、例ニ依りて削る○誘説、日本靈異記、機をワカツリとよめ、○見逐下、原本職汝之由の四字有り、次文の此小加、なるふめれむ削る

俱懷奸偽、誘説為歌可君、記云、為有非岐彌名、專信其言、不憂國難、記云、為背吾心、縱肆暴虐、由是見逐、汝等來住任那、恒行不善、任那日損、職汝之由、汝是雖微、譬猶小火、燒焚山野、連近村邑、由汝行惡、當敗任那、遂使下海、西諸國官家、不得長奉、天皇之闕、今遣奏天皇、乞移汝等、還其本處、汝亦往聞、又謂日本府、

卿、任那、早岐等曰、夫建<sub>レ</sub>任那<sub>ノ</sub>之國、  
不<sub>レ</sub>假<sub>レ</sub>天皇<sub>ノ</sub>之威、誰能<sub>レ</sub>建<sub>レ</sub>也、故我思<sub>ハ</sub>  
欲<sub>ハ</sub>就<sub>レ</sub>天皇<sub>ニ</sub>請<sub>フ</sub>將士<sub>ヲ</sub>而助<sub>テ</sub>任那<sub>ノ</sub>之國、  
將士<sub>ノ</sub>之糧、我當<sub>ニ</sub>須<sub>ハ</sub>運<sub>バ</sub>將士<sub>ノ</sub>之數、未<sub>レ</sub>  
限<sub>ニ</sub>若干<sub>ノ</sub>、運<sub>レ</sub>糧<sub>ヲ</sub>之處亦難<sub>ニ</sub>自決<sub>ハ</sub>、願<sub>ハ</sub>居<sub>ニ</sub>  
一處<sub>ニ</sub>俱<sub>ニ</sub>論<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>擇<sub>ニ</sub>從<sub>ニ</sub>其<sub>ノ</sub>善<sub>ヲ</sub>、將<sub>レ</sub>奏<sub>ニ</sub>天  
皇<sub>ニ</sub>、故頻<sub>ニ</sub>遣<sub>レ</sub>召<sub>ニ</sub>、汝猶<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>來<sub>レ</sub>不得<sub>レ</sub>議<sub>ニ</sub>也、  
日本府答<sub>テ</sub>曰、任那<sub>ノ</sub>執事<sub>ヲ</sub>不<sub>レ</sub>赴<sub>レ</sub>召<sub>ニ</sub>者、  
是由<sub>ニ</sub>吾<sub>ノ</sub>不<sub>レ</sub>遣<sub>レ</sub>、不得<sub>レ</sub>往<sub>ニ</sub>之<sub>ヲ</sub>、吾遣<sub>レ</sub>奏<sub>ニ</sub>天

印歌臣、上<sub>ニ</sub>鳥  
歌可<sub>レ</sub>臣<sub>ト</sub>行<sub>ル</sub>  
と、同人<sub>ノ</sub>ふあ  
ら<sub>ズ</sub>、假名<sub>モ</sub>違  
へ<sub>テ</sub>、原本<sub>ノ</sub>細字  
み語<sub>ヲ</sub>訛<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>詳<sub>ト</sub>  
り<sub>リ</sub>、例<sub>ニ</sub>よ<sub>リ</sub>  
て削<sub>ル</sub>

皇<sub>ニ</sub>還<sub>レ</sub>使<sub>テ</sub>宣<sub>フ</sub>曰、朕當<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>印歌<sub>ノ</sub>臣<sub>ヲ</sub>遣<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>  
新羅<sub>ニ</sub>、以<sub>テ</sub>津守<sub>ヲ</sub>連<sub>テ</sub>遣<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>百濟<sub>ニ</sub>、汝待<sub>テ</sub>聞<sub>ル</sub>  
勅<sub>ヲ</sub>際<sub>ニ</sub>、莫<sub>ニ</sub>自<sub>レ</sub>勞<sub>レ</sub>往<sub>ニ</sub>新羅<sub>ニ</sub>、百濟<sub>ニ</sub>也、宣<sub>レ</sub>勅<sub>ヲ</sub>  
如是<sub>ニ</sub>、會<sub>ニ</sub>聞<sub>テ</sub>印歌<sub>ノ</sub>臣<sub>ヲ</sub>使<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>新羅<sub>ニ</sub>、乃<sub>チ</sub>追<sub>テ</sub>  
遣<sub>レ</sub>問<sub>ニ</sub>天皇<sub>ノ</sub>所<sub>ヲ</sub>、宣<sub>レ</sub>詔<sub>曰</sub>、日本<sub>ノ</sub>臣<sub>ノ</sub>與<sub>ニ</sub>任  
那<sub>ノ</sub>執事<sub>ノ</sub>、應<sub>ニ</sub>就<sub>ニ</sub>新羅<sub>ニ</sub>、聽<sub>ニ</sub>天皇<sub>ノ</sub>勅<sub>ヲ</sub>、而不<sub>レ</sub>  
宣<sub>ニ</sub>就<sub>ニ</sub>百濟<sub>ニ</sub>、聽<sub>ニ</sub>命<sub>ヲ</sub>也、後津守<sub>ヲ</sub>連<sub>テ</sub>遂<sub>ニ</sub>來<sub>リ</sub>  
過<sub>レ</sub>此<sub>ニ</sub>、謂<sub>テ</sub>之<sub>曰</sub>、今余<sub>ハ</sub>被<sub>レ</sub>遣<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>百濟<sub>ニ</sub>者、  
將<sub>レ</sub>出<sub>ニ</sub>在<sub>ニ</sub>下<sub>ニ</sub>韓<sub>ニ</sub>、之<sub>ノ</sub>百濟<sub>ノ</sub>郡<sub>ノ</sub>令<sub>ニ</sub>城主<sub>ヲ</sub>唯

許勢奈率物部  
奈率と皇国人  
彼地の婦を娶  
て生れる其子  
みや、上みやか  
る例なり

聞此說、不聞<sub>下</sub>任那、與日本府、會於  
百濟<sub>ニ</sub>聽<sub>中</sub>天皇、勅<sub>上</sub>故不往<sub>マ</sub>焉、非任那  
意、於是任那、早岐等曰、由使來召、  
使欲往<sub>マ</sub>參日本府、卿不肯發遣、故  
不往<sub>マ</sub>焉、大王爲建<sub>上</sub>任那、觸情曉示、  
觀茲、忻喜難可具申、三月百濟遣  
奈率阿亡得文、許勢、奈率歌麻物  
部、奈率歌非等、上表曰、奈率彌麻  
沙、奈率已連等、至臣蕃奉詔書曰

爾等宜共<sub>上</sub>在彼、日本府、同謀善計、  
早建<sub>中</sub>任那、爾其戒之、勿被他誑、又  
津守、連等、至臣蕃奉勅書、問建任  
那、恭兼來、勅不敢停時、爲欲共謀、  
乃遣使召<sub>上</sub>日本府、百濟本記云、遣  
召焉、胡跛臣、蓋  
是也與任那、俱對言、新年既至、願  
過而往、久而不就、復遣使召、俱對  
言、祭時既至、願過而往、久而不就、  
復遣使召、而由遣<sub>上</sub>微者、不得同計、

阿賢移那斯と、佐魯麻都とも、二人の名あり、原本細字ふ、二人名也、已見上文とあるハ、後人の所為あれむ削つ

夫任那之不起召者、非其意焉、是阿賢移那斯佐魯麻都、奸佞之所作也、夫任那者、以安羅為兄、唯從其意、安羅人者、以日本府為天、唯從其意、百濟本記云、以安羅為今的臣、吉備臣、河内直等、咸從移那斯麻都指搗而已、移那斯麻都雖是、小家微者、專擅日本府之政、又制任那障、而勿遣、由是不得同計

已麻奴跪、上ハ見、蓋是津守、連也の、六字、後人の所為、あれむ、削る、○二人、移那斯と、麻都を云、細字、ふ、二人者、移那斯與麻都也、十字、り、集解、私記、攬入、とし、て、削、○的、臣、等、下、原本、等、者、謂、吉備、第、君、臣、河、内、直、等、也、の、十、三、字、り、集、解、ふ

奏答天皇、故留已麻奴跪、別遣使、迅如飛鳥、奉奏天皇、假使二人、在於安羅、多行奸佞、任那難建、海西諸國、必不獲事、伏請移此二人、還其本處、勅諭日本府、與任那而圖、建任那、故臣遣奈率彌麻沙、奈率已連等、副已麻奴跪、上表、以聞、於是詔曰、的臣等、往來新羅、非朕心也、曩者、印支彌、與阿鹵、早岐在時、



私記攬入とし、  
て削るは、  
ふ○印支弥を、  
下文日本府  
印岐弥とあり、  
細字未詳の二  
字あり、例ふよ  
めて削る

久禮成、原本成  
を戎小誤より

為<sub>ニ</sub>新羅<sub>ノ</sub>所<sub>レ</sub>逼<sub>レ</sub>而<sub>、</sub>不得<sub>ニ</sub>耕種<sub>ヲ</sub>、百濟路  
迥<sub>トホク</sub>不能<sub>レ</sub>救<sub>レ</sub>急<sub>、</sub>由<sub>テ</sub>的<sub>ノ</sub>臣等<sub>、</sub>往<sub>キ</sub>來<sub>ニ</sub>新羅<sub>ニ</sub>、  
方<sub>ニ</sub>得<sub>ニ</sub>耕種<sub>ヲ</sub>、朕所<sub>ニ</sub>曾聞<sub>キ</sub>、若<sub>シ</sub>已<sub>ニ</sub>建<sub>ニ</sub>任<sub>ニ</sub>那<sub>ヲ</sub>、  
移<sub>レ</sub>那斯麻都<sub>、</sub>自然<sub>ニ</sub>却退<sub>、</sub>豈足<sub>レ</sub>云<sub>ニ</sub>乎<sub>、</sub>  
伏<sub>テ</sub>承<sub>テ</sub>此<sub>ノ</sub>詔<sub>ヲ</sub>、喜懼<sub>兼</sub>懷<sub>レ</sub>而<sub>、</sub>新羅<sub>ニ</sub>誰<sub>レ</sub>朝<sub>ス</sub>、  
知<sub>ス</sub>匪<sub>ニ</sub>天<sub>ノ</sub>勅<sub>ヲ</sub>、新羅春取<sub>ニ</sub>咏淳<sub>ヲ</sub>、仍<sub>ニ</sub>擯<sub>ニ</sub>出<sub>ス</sub>、  
我<sub>ガ</sub>久禮山<sub>ニ</sub>戍<sub>シ</sub>而<sub>、</sub>遂<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>之<sub>、</sub>近<sub>ニ</sub>安羅<sub>ニ</sub>處<sub>ハ</sub>、  
安羅耕種<sub>、</sub>近<sub>ニ</sub>久禮山<sub>ニ</sub>處<sub>、</sub>新羅耕種<sub>、</sub>  
各自<sub>ニ</sub>耕<sub>シ</sub>之<sub>、</sub>不相<sub>ニ</sub>侵奪<sub>ハ</sub>、而<sub>、</sub>移<sub>レ</sub>那斯麻

既洒臣時、下原  
本皆未詳の細  
字あり、例ふよ  
めて削る

荷山、東国通鑑  
百濟腴支王三  
年、條ふ、擯<sub>ニ</sub>女子<sub>ヲ</sub>  
荷山島<sub>ニ</sub>

都<sub>、</sub>過<sub>テ</sub>耕<sub>シ</sub>他<sub>ノ</sub>界<sub>ヲ</sub>、六月<sub>ニ</sub>逃<sub>ニ</sub>去<sub>キ</sub>於<sub>テ</sub>印支彌<sub>ニ</sub>、  
後<sub>ニ</sub>來<sub>ニ</sub>許<sub>シ</sub>勢<sub>、</sub>臣<sub>ガ</sub>時<sub>、</sub>百濟本記云、我<sub>ガ</sub>留<sub>ル</sub>、  
新羅無<sub>ニ</sub>復<sub>レ</sub>侵<sub>ニ</sub>逼<sub>レ</sub>他<sub>ノ</sub>境<sub>ヲ</sub>、安羅不<sub>レ</sub>  
言<sub>フ</sub>爲<sub>ニ</sub>新羅<sub>ノ</sub>逼<sub>レ</sub>不得<sub>ニ</sub>耕種<sub>ヲ</sub>、臣嘗<sub>テ</sub>聞<sub>ク</sub>、新  
羅每<sub>ニ</sub>春秋<sub>ニ</sub>多<sub>ニ</sub>聚<sub>ニ</sub>兵甲<sub>ヲ</sub>、欲<sub>レ</sub>襲<sub>ニ</sub>安羅<sub>ト</sub>與<sub>ニ</sub>  
荷山<sub>、</sub>或<sub>ハ</sub>聞<sub>キ</sub>當<sub>ニ</sub>襲<sub>ニ</sub>加羅<sub>ヲ</sub>、頃<sub>ニ</sub>得<sub>ニ</sub>書信<sub>ヲ</sub>、便<sub>チ</sub>  
遣<sub>ニ</sub>將士<sub>ヲ</sub>、擁<sub>ニ</sub>守<sub>ニ</sub>任<sub>ニ</sub>那<sub>ヲ</sub>、無<sub>ニ</sub>懈<sub>リ</sub>息<sub>也</sub>、頻<sub>ニ</sub>發<sub>テ</sub>  
銳<sub>ニ</sub>兵<sub>ヲ</sub>、應<sub>ニ</sub>時<sub>ニ</sub>往<sub>キ</sub>救<sub>フ</sub>、是以<sub>テ</sub>任<sub>ニ</sub>那<sub>ヲ</sub>隨<sub>テ</sub>序<sub>ニ</sub>耕<sub>シ</sub>  
種<sub>シ</sub>新羅不<sub>レ</sub>敢<sub>ニ</sub>侵逼<sub>レ</sub>而<sub>、</sub>奏<sub>ス</sub>百濟路<sub>ニ</sub>迥<sub>トホク</sub>

奈麻禮冠、新紀  
私記曰、案新  
羅國七位、冠也  
とらとど、隋書

不能救急、由的、臣等往來新羅、方  
得耕種、是上欺天朝、轉成奸佞也、  
曉然若是、尚欺天朝、自餘虛妄、必  
多有之、的、臣等猶住安羅、任那之  
國、恐難建立、宜早退却、臣深懼之、  
佐魯麻都、雖是韓腹、位居大連、廁  
日本、執事之間、入榮班、貴盛之例、  
而今反著新羅、奈麻禮冠、即身心  
歸附於他、易照孰觀所作、都無怖

北史東國通鑑  
等、お、扱、ふ、十、等  
を、大、奈、麻、と、云、  
十、一、等、を、奈、麻、  
と、り、や、猶、繼、體  
紀、に、注、せ、や、○  
函、跛、通、證、に、味  
國、王、名、と、云、や、

畏、故前奏惡行、具錄聞訖、今猶著  
他服、日赴新羅、域、公私往還、都無  
所憚、夫、味國之滅、匪由他也、味國、  
之、函、跛、早、岐、貳、心、加、羅、國、而、內、應  
新羅、加羅、自外合戰、由是滅焉、若  
使、函、跛、早、岐、不、爲、內、應、味、國、雖、少  
未、必、亡、也、至、於、卓、淳、亦、復、然、之、假  
使、卓、淳、國、主、不、爲、內、應、新、羅、招、寇、  
豈、至、滅、乎、歷、觀、諸、國、敗、亡、之、禍、皆

奸、日本靈異記  
小、奸、可、隆、弥、と  
注、セ、マ、

由<sup>ヨハナリ</sup>内應貳心、人<sup>ニ</sup>者、今麻都等腹<sup>ウレハシク</sup>心  
新羅、遂<sup>ニ</sup>着<sup>テ</sup>其<sup>キモノ</sup>服<sup>カヨヒテ</sup>、往<sup>ヒテ</sup>還<sup>ル</sup>、且夕<sup>ニ</sup>陰<sup>ヒノカニ</sup>構<sup>フ</sup>奸<sup>カクミ</sup>  
心<sup>ゴハシラ</sup>乃<sup>ハ</sup>恐<sup>ハ</sup>任那由<sup>テ</sup>茲<sup>ニ</sup>永滅<sup>ヒム</sup>任那若滅<sup>ヒハ</sup>  
臣<sup>マシカ</sup>國孤危<sup>ヒトリ</sup>思<sup>ヒ</sup>欲<sup>シ</sup>朝<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>、豈復得<sup>ム</sup>耶、伏  
願<sup>ハ</sup>天皇<sup>ハルカニ</sup>玄鑒<sup>ク</sup>遠察<sup>ク</sup>速移<sup>テ</sup>本處<sup>ニ</sup>以安<sup>シク</sup>  
任那<sup>ラ</sup>、冬十月百濟使人、奈率得文、  
奈率歌麻等罷歸<sup>マカリカヘル</sup>、十月奈率得文、  
奈率<sup>ナ</sup>率<sup>ソ</sup>歌<sup>カ</sup>麻<sup>マ</sup>等<sup>ト</sup>、還<sup>レ</sup>自<sup>レ</sup>日本<sup>ニ</sup>、曰<sup>ク</sup>、所<sup>レ</sup>奏<sup>ス</sup>河  
内<sup>ノ</sup>、直<sup>ニ</sup>移<sup>ル</sup>那<sup>ス</sup>麻<sup>マ</sup>都<sup>ト</sup>等<sup>ト</sup>、事<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>報<sup>ル</sup>勅<sup>也</sup>也、  
十一月百濟遣使<sup>ラ</sup>、名<sup>ル</sup>日本府臣任

卒麻、下子卒麻  
因<sup>レ</sup>何<sup>ヲ</sup>○斯  
二岐及散半矣  
も因名あり○  
二首位通證ふ  
二之上の謬り  
と云、○子他、  
集解ふ因名と

那<sup>ナ</sup>執事<sup>ヲ</sup>曰<sup>ク</sup>、遣<sup>タテマカス</sup>朝<sup>ニ</sup>天皇<sup>ミカドニ</sup>、奈率得文、許  
勢<sup>セ</sup>奈率哥麻、物部奈率哥非等、還  
自<sup>レ</sup>日本<sup>ニ</sup>、今日本府臣<sup>ヤツコ</sup>及任那國、執  
事<sup>ニ</sup>、宜<sup>ク</sup>來<sup>テ</sup>聽<sup>テ</sup>勅<sup>ヲ</sup>、同<sup>ク</sup>議<sup>シ</sup>任那<sup>ノ</sup>日本吉備、  
臣<sup>シ</sup>、新羅下<sup>スレン</sup>早岐大不孫<sup>ダイフソソ</sup>久取<sup>ク</sup>柔利<sup>ニ</sup>、  
加羅上<sup>カシ</sup>首位<sup>ニ</sup>古殿<sup>コテン</sup>奚<sup>キ</sup>卒麻<sup>ソマ</sup>君<sup>ノ</sup>、斯二  
岐<sup>シ</sup>君<sup>ノ</sup>、散半矣<sup>サンハニ</sup>君<sup>ノ</sup>、兒<sup>ノ</sup>、多羅<sup>タラ</sup>、二首位訖  
乾智<sup>ケンチ</sup>子他<sup>シタ</sup>、早岐<sup>ソウシ</sup>、久嗟<sup>クサ</sup>、早岐<sup>ソウシ</sup>、仍<sup>ニ</sup>赴<sup>ル</sup>百  
濟<sup>ヒ</sup>、於是百濟王聖明<sup>ホウメイ</sup>、略<sup>ハク</sup>以<sup>テ</sup>詔<sup>シ</sup>、書<sup>テ</sup>示<sup>ス</sup>

云々○早岐、原  
本顛倒セリ○  
久瑠、国名多  
ベシ○印岐弥  
上ハ見返トモ  
原本弥を祿ハ  
誤トモ

曰、吾遣奈率彌麻佐、奈率已連、奈  
率用哥多等朝於日本、詔曰早建  
任那、又津守、連奉勅、問成任那、故  
遣召之、當復何如、能建任那、請各  
陳謀、吉備、臣任那、早岐等曰、夫建  
任那、國唯在大王、欲冀遵王俱奏  
聽勅、聖明王謂之曰、任那之國、與  
吾百濟、自古以來約為子弟、今日  
本府、印岐彌  
謂下在任那一日  
本ノ臣名也 既計新

計原本討誤  
其國新羅を  
指原本未詳ト  
削○食言、傳  
公十五年、左傳  
小我食吾言、注  
小食、消也、国語  
十四、小曾人食  
言、注小食、偽也  
○股肱之國、書  
益授小、臣作朕、  
股肱耳目、大全  
小君資、臣以為  
助、猶元首、須股  
肱耳目、以為用  
也

羅、更將伐我、又樂聽新羅、虛誕謾  
語也、夫遣印支彌於任那者、本非  
復害其國、往古來今、新羅无道、食  
言違信、而滅卓淳、股肱之國、欲快  
返悔、故遣召到、俱兼恩詔、欲冀興  
繼任那之國、猶如舊日、永為兄弟、  
竊聞新羅安羅、兩國之境、有大江  
水、要害之地也、吾欲據此、脩繕六  
城、謹請天皇三千兵士、每城充以

降首、後漢書西域傳、雖有降首曾、莫懲革注、首猶服

微弱、終靖紀、予懦弱、をよみたれむ、彼処、不注しつ

五百、并我兵士、勿使作田而過惱者、久禮山之五城、庶自投兵降首、卓淳之國亦復當興、所請兵士、吾給衣糧、欲奏天皇、其策一也、猶於南韓、置郡、令城主者、豈欲違背天皇、遮斷貢調之路、唯庶尅濟多難、殲撲強敵、凡厥凶黨、誰不謀附、此敵強大、我國微弱、若不置南韓郡、領域主、脩理防禦、不可以禦此強

敵、亦不可以制新羅、故猶置之、攻逼新羅、撫存任那、若不爾者、恐見滅亡、不得朝聘、欲奏天皇、其策二也、又吉備臣、河内直移那斯麻都、猶在任那國者、天皇雖詔、建成任那、不可得也、請移此四人、各遣還其本邑、奏於天皇、其策三也、宜與日本臣、任那、早岐等、俱奉遣使、同奏天皇、乞聽恩詔、於是吉備臣早

日本大臣、上ふ  
て大連とつり

岐等曰、大王所述三策、亦協愚情

而已、今願歸以敬諮日本大臣

任那日本府安羅王加羅王俱遣

使同奏天皇、此誠千載一會之期

可不深思而熟計歟、十二月越國

言於佐渡嶋北、御名部之碕岸有

肅慎人、乘一船舶而淹留、春夏捕

魚充食、彼嶋之人言非人也、亦言

鬼魅不敢近之、嶋東禹武邑人採

御名部、和名抄  
佐渡國、羽茂郡  
郷名、水湊、美奈  
也、とつり○肅  
慎を、ミシハセ  
とよめると思  
ひえぎ、齊明四  
年、紀ふ、河部引

拾椎子、爲欲熟擊、著灰裏炮、其皮  
甲化成二人、飛騰火上、一尺餘許、  
經時、相鬪、邑人深、以爲異、取置於  
庭、亦如前、飛相鬪不已

田、臣比羅夫、討  
肅慎、獻牛、羆二、  
羆皮七十枚、同  
六年、紀ふ、率、船  
師二百艘、伐、肅  
慎國、後漢書東  
夷傳、不、提、妻、古  
肅慎之國也、在  
夫餘東北千餘里、云々、晉書東夷傳、不、肅慎氏、一名提妻、在不咸山北、去夫餘可六  
十一日、東濱大海、西接冠漫汗國、云々、猶何くとも見よと略、史記、周本紀、竹  
書紀年等、ふ、息慎、ふ、作、文、記、司馬相如傳の注、ふ、鞞、鞞、と記、東都事略、  
女真と記せよと、其實一あり、是と朝鮮の東北に在、我、蝦夷地の西に接、  
今滿州と稱せり、鞞、鞞、も多賀城の碑、ふ、去、鞞、鞞、國界、三千里と記し、續紀八、  
遣、從、七位上諸君、鞍男等六人、於鞞、鞞、國、觀、其、風俗、ふ、ど、見、ゆ、○捕魚、和名抄、ふ、漁、  
捕魚也、訓、須奈度利、とつり、生魚、補、あり、○鬼魅、和名抄、鬼魅、部、不、魅、魅、を須太萬  
と注し、窮鬼を伊岐須太萬と注し、木魅、山鬼を古太萬と注し、魍魎を美豆波と  
注せり、さよと舊讀のゆ、姑、オニとよむべし、○禹武邑、て、秋紀、ふ、佐渡國、羽、  
郡也、とつり、が如し、○椎子、和名抄、ふ、之、比、○化成、二人、酉陽雜俎、續集、ふ、有、嬰、兒

長尺餘云々、踏空數尺云々、風俗通云、有大樹伐之、木中血出云々、上有一空處、白頭公可長四五尺、忽出行、或云相類、たる奇事、亦て、亦云支那書、亦云、如此の奇談、故舉、不違、つら、史の五行志を、披見、るべし、爰、

魁鬼、和名抄、小魁、早神也、和名、比天利、乃加美、と注せ、即日、照、神、あり、詩、大、雅、子、早魁、為、鹿、

大、全、小、早、神、也、あ、ど、つ、ら、と、舊、讀、み、從、ふ、べし、○瀬、河、詳、あら、

す、○浦、神、新、紀、小、浦、神、若、此、度、津、神、社、歌、と、記、せ、り、式、小、佐、渡、国、羽、茂、郡、度、津、神、社、と、つ、り、伴、信、友、が、神、名、式、土、代、ふ、も、此、件、の、こ、と、を、記、せ、り、○嚴、伊、勢、物、語、ふ、む、り、

し、人、も、か、く、つ、ら、も、や、ま、い、や、依、を、あ、ん、し、り、る、宇、治、拾、遺、三、小、熱、田、神、い、ち、も、や、く、お、と、し、ほ、し、て、云、々、按、威、遠、あり、○忌、人、を、肅、慎、人、を、神、の、忌、み、惡、し、終、ふ、よ、て、

岫、俗、呼、肅、慎、隈、也

近、渴、飲、其、水、死、者、且、半、骨、積、於、巖、

有、久、占、云、是、邑、人、必、為、魁、鬼、所、迷、惑、不、久、如、言、被、其、抄、掠、於、是、肅、慎、人、移、就、瀬、河、浦、浦、神、嚴、忌、久、不、敢、

六年春三月遣膳臣巴提便使于百濟夏五月百濟遣奈率其悽奈率用歌多施德次酒等上表秋九月百濟遣中部護德菩提等使于任那贈吳財於日本府臣及諸早岐各有差是月百濟造丈六佛像製願文曰蓋聞造丈六佛功德甚大今敬造以此功德願天皇獲勝

国神の国人を愛しみ給ふ昔のみならず今もまろり○死者も肅慎を云○肅慎隈も其名今も存るはろ土人小問ふべし

巴提便を原本ハスビと点し日本紀竟宴歌の仮名注ふも然記せり按ふ提字ふス音ふく巴も便も此紀ふ仮名ふ用ひたる例見をされど姑ハテビとよむべし

○丈六も長一丈六尺あり観佛三昧經小釋迦牟尼佛身長丈六

圓光七尺、北史胡叟傳、沙門法成、率僧數千人、鑄丈六金像云々、初此佛をホトケとよめ、通證、淨屠家也、注せ、即淨圖とも部多とも云々を、佛字不當なる本、後漢書光武十王傳、為淨屠齋戒祭祀と云、淨屠を佛也と注し、同書襄楷傳、宮中立黃老淨屠之祠と云、淨屠佛也と注せり、翻譯名義集、佛陀、大論云、秦言智者、知過去未來現在衆生非衆生、數有常無常等、一切諸法、菩提樹下、了了覺知、故名佛陀、云々、祖庭事苑、淨圖、梵語佛陀、或云淨圖、或云部多、或母馱、或沒陀、皆五天語、今並譯為覺、道士三破論云、舊經本云淨屠、羅什改為佛徒、知其源惡、故也云々、うゝと云、佛字、ホトケの義、そりらぬと、淨圖の音を以て、佛をよみたるあり、列子、西方有聖人焉、其名曰佛と云、佛字不定、後、云々、云、れむ、妨、あし、初此不見、云々、丈六佛と、百濟、云、云、○彌移居、官家を云、○解脫、翻譯名義集、巨細相容變化、隨意於法自在、解脫無礙、故名解脫、又曰心得自在、不為不能所縛、故曰解脫云々

善之德、天皇所用、彌移居國、俱蒙福祐、又願普天之下、一切衆生、皆蒙解脫、故造之矣

十一月、膳臣巴提便、還自百濟言、臣被遣使、妻子相逐去、行至百濟濱、日晚、停宿、小兒忽亡、不知所之、其夜大雪、天曉始求、有虎連跡、臣乃帶刀、擐甲、尋至巖岫、拔刀曰、敬受絲綸、劬勞陸海、櫛風沐雨、藉草班荆者、為愛其子、令紹父業也、惟汝威神、愛子一也、今夜兒亡、追蹤覓至、不畏亡命、欲報故來、既而其

百濟濱、下、原本濱、海濱也、の細字、り、例、よ、マ、て、削、る、○、絲、綸、文、選、齊、竟、陵、文、宣、王、行、狀、小、獻、納、樞、機、絲、綸、允、緝、注、小、李、善、禮、記、曰、王、言、如、絲、其、出、如、綸、李、周、翰、曰、絲、綸、天、子、之、言、也、云、々、禮、記、也、緇、衣、み、見、也、たり、櫛、風、新、撰、字、鏡、小、梳、加、之、良、介、豆、留、万、葉、十、八、小、安、佐、禰、我、美、

○日本紀標注卷之十六  
○三十



可伎母氣頭良  
 受云々、梳も説  
 文不、理髮也と  
 りとも、髪を取  
 揚るをけづる  
 と云、○沐雨、是  
 をユスルとよめるを、俗ユスグと云て、濯、おふまじ、源氏若菜ふ、ゆをほつき  
 とりるを、岷江入楚ふ、沛器を當たり、濯、べき水を入る器あり、同東屋ふ、女君も  
 汚ゆまほのやどあり、心集五ふ、ゆをほうけせよ、物へ行む云々、顔  
 ふても手ふても、洗むむとさる状あり、アミをゆみあむほと活きて、俗ユ浴ると  
 云、基俊集ふ、月頃、づらふなと侍て、塩湯ゆむとて津の国の方みまうり  
 て、湯ゆみとて、のほる云々、沐、字書ふ、濯、髪也と注せ、雨ふと主と髪ゆ濡  
 るとのゆゑ、沐、字を用ひたり、擲風、沐雨の字、魏志鮑勳傳、み見たり、○藉草  
 班荆、字の如し、万葉五ふ、玉、梓乃、道乃、久麻尾、久佐太、袁利、志婆、乃、利志、伎提  
 云々、字書ふ、荆、楚木也と注し、上方ふて、ソダと云、ものあり、班荆の字を襄公二  
 十六年、左傳、み見て、班、布也と注せ、○威神、上ふ二狼相闘を見て、貴神とゆ  
 るふ、かふじ、万葉十六ふ、韓、乃、虎、云、神、乎、生、取、爾、ハ、頭、取、持  
 來、其、皮、乎、多、彌、爾、刺、○一、一、癖、ふ、て、世、習、と、云、ら、如、し

虎進前、開口欲噬巴提便、忽申左、  
 手執其虎舌、右手刺殺、剥取皮還、  
 是歲高麗大亂、被誅殺者衆

細羣鹿羣、飯百濟本記云、十二月甲午、高麗國、  
 不説、たろ名、細羣、與、鹿、羣、戰、于、官、門、伐、鼓、戰、關、  
 して、神武細、細羣、敗、不、解、兵、三、日、盡、捕、誅、細、羣、  
 見、と、た、ろ、女、軍、子、孫、戊、戌、狗、鵠、香、罌、上、王、薨、也、  
 男軍の如り、○柏、た、狗、の、略、字、あり、む、即、高、麗、を、指、せ、り、三、代、實、録、五、ふ、狹、手、彦、云、  
 々、獻、高、麗、之、囚、今、山、城、国、柏、入、是、也、と、り、る、を、見、ゆ、べ、し、後、漢、書、東、夷、傳、高、句、驪、條、  
 ふ、句、驪、一、名、狗、耳、と、あ、り、○、鷓、香、罌、を、彼、土、の、地、名、多、り、○、王、薨、東、国、  
 通鑑、高、句、麗、安、原、王、十、五、年、條、ふ、寶、延、薨、號、為、安、原、王、と、り、り、是、り、  
 丙午三日、一、  
 十、雙、著、讀、ト、フ、  
 子、と、よ、め、れ、ど、  
 字、書、小、持、一、佳、  
 白、雙、二、隻、曰、雙、  
 と、も、雙、兩、隻、也、  
 と、も、と、り、と、む、  
 ハ、タ、フ、子、と、訓、  
 む、べ、し、○、癸、未、  
 十、二、日、○、今、來、

七年春正月、甲辰朔、丙午、百濟使  
 人、中部奈率已連等罷歸、仍賜以  
 良馬七十匹、船一十隻、夏六月壬  
 申朔癸未、百濟遣中部奈率、掠葉  
 禮等、獻調、秋七月倭國、今來郡言

○日本紀標注卷之十六  
 ○三十一

郡、今大和、因小  
此郡名多し志  
小吉野郡、今  
水村あり、此地  
の符と雄略紀  
み注せり。○川

於五年春、川原、民直宮、登樓騁望、  
乃見良駒、紀伊國漁者、負贄草馬  
之子也

原民直宮、大和志高市郡、川原村あり、此地の、齊明紀孝德紀天武紀等み見  
きたり、姓氏録、民直、天德日命、十七世孫、若桑、足尼之後也、とあり、宮と名あり、  
原本細字、小宮名とあり、と例ふより、て削る。○紀伊國以下十六字、原本細字、  
書り、ふ、集解、小大字、小華、た、小從ふ。○草馬、匡謬正俗、小、此馬、謂之草馬、何也、  
答曰、本以壯馬、壯健、堪駕、乘及軍戎者、皆伏草、極弱、而養之、其壯馬、唯尤番守、不暇  
服役、常牧于草馬、故稱草馬、和名抄、小此馬、一名驛馬、和名米馬、小の草馬、今昔  
物語廿九、同、此一、不見、此、北文吐谷  
渾傳、小、得波斯草馬、放入海云々  
護養兼年、文  
選、赫白馬、賦、み、  
見、毛、李善、  
襲、受、也、と注せ

養兼年、及壯鴻、驚龍、翥、別輩、越群、  
睨影、高鳴、輕超、母脊、就而買取、襲

兼年、食物  
の多きを云、○  
蕭天武紀、小、飄  
をふみて、馳騰  
る状を云、此條  
褚白馬、賦と專、  
おなじ。○馳驟  
おををウゴツ  
クとよめる、  
動つくみて、俗  
小ウロツク、  
云、小おなじ、舊  
讀二字を合、て  
よめ、ふ、非、ふ、  
マ、遊仙窟、小、馳、  
し、文選、褚白馬、賦、序、小、服、  
之、劉良曰、服、御、乘、駕、也、合、度、合、節、度、也、と注せ、  
諸陵式、小、檜、隈、大、内、陵、と、あり、猶、此、地、の、お、と、  
續、紀、一、同、三、同、十、八、等、み、見、  
○日本紀標注卷之十六  
○三十二

服御隨心、馳驟合度、超渡大内丘、  
之壑、十八丈焉、川原、民直宮、檜隈、  
邑人也、是歲高麗大亂、凡鬪死者  
二千餘、百濟本記云、高麗以正月  
八歲、猶、王有、三、夫、人、正、夫、人、無、子、  
中、夫、人、生、子、其、舅、氏、鹿、羣、也、小  
夫、人、生、子、其、舅、氏、細、羣、也、及、  
疾、篤、細、羣、鹿、羣、各、欲、立、其、夫、人、之  
子、故、細、羣、死、者、  
二十餘人也

○槍隈邑も、右ふ云、るが如し、今槍、熊村あり○狛王以下、  
百濟の古傳をあらしめむため、撰者の心として、記せほあり

德率も、百濟第  
四等の官あり

○真慕宜文も、  
二人の名あり

八年夏四月、百濟遣前部德率真

慕宜文、奈率歌麻等、乞救軍、仍貢

下部東城子言代德率汶休麻那

九年春正月、癸巳朔乙未、百濟使

人、前部德率真慕宜文等、請罷因

詔曰、所乞救軍、必當遣救、宜速報

王、夏四月壬戌朔甲子、百濟遣中

部杆率掠葉禮等、奏曰、德率宜文

等、奉勅至臣蕃曰、所乞救兵、應時

遣送、祇兼恩詔、嘉慶無限、然馬津

城之役、麗率衆圍馬津城、高虜謂

之曰、由安羅國與日本府、招來勸

罰、以事准况、寔當相似、然三廻欲

審其言、遣召而並不來、故深勞念

伏願可畏天皇西蕃皆稱日本天

先為勘當、暫停所乞救兵、待臣遣

報、詔曰、式聞呈奏、爰觀所憂、日本

甲子三日○中  
部杆率の中部  
を方名、杆率  
第五等の官之

馬津城、東国通

鑑、百濟始祖八

年、條子、築馬首

城、堅瓶山柵○

一本云の三字

原本、子脱たり

例、ふよりして補

ふ○辛丑九日

○准况、字の如

可畏も、俗みコ

ハシと云、意み

て、平語みも天

皇と申せむ、必

かしあしてふ

語を、加て称奉

しをや

復何如下原本  
消息何如の四

府與安羅不救隣難亦朕所疾也  
又復密使于高麗者不可信也朕  
命即自遣之不命何容可得願王  
開襟緩帶恬然自安勿深疑懼宜  
共任那依前勅戮力俱防北敵各  
守所封朕當遣送若干人充實安  
羅逃亡空地六月辛酉朔壬戌遣  
使詔于百濟曰德率宣文取歸以  
後當復何如朕聞汝國為狗賊所

壬戌三日

字、  
、  
辛未十二日

辛卯七日○將  
德を百濟第七  
等の官ふて服  
紫帶固徳も第  
九等の官ふて  
赤帯を服と階  
書百濟傳不見  
をた？○移那  
斯麻都原本移を延小作  
とり、上文小抄りて改む

害宜共任那策勵同謀如前防距  
閏七月庚申朔辛未百濟使人掠  
葉禮等罷歸冬十月遣三百七十  
人於百濟助築城於得爾辛  
十年夏六月乙酉朔辛卯將徳文  
貴固徳馬次文等請罷歸因詔曰  
移那斯麻都陰私遣使高麗者朕  
當遣問虛實所乞軍者依願停之

庚寅十日○阿比多詳ありず

文貴、原本文を久み作より上、文み提りて改む。○馬進文の進を、上文次み作。○大市頭、歸通證ふ一説、市當作刀、流水續談古詩、何時大刀頭、注大刀頭、鑲還也、歸字疑衍、旁注誤入本文者、蓋大刀頭後、如常無異

十一年春二月辛巳朔庚寅遣使

詔于百濟百濟本記云三月十二日辛酉日本使人阿比

多率三舟來至都下曰朕依將德文貴固德

馬進文等所上表意一一教示如

視掌中思欲具情冀將盡抱大市

頭歸後如常無異今但欲審報辭

故遣使之又復聞奈率馬武是王

之股肱臣也納上傳下甚協王心

而為王佐若欲國家無事長作官

家永奉天皇宜以馬武為大使遣

朝而已重詔曰朕聞北敵強暴故

賜矢三十具庶防一處夏四月庚

辰朔在百濟日本王人方欲還之

百濟本記云四月一日百濟王聖

庚辰日本阿比多還也

明謂王人曰任那之事奉勅堅守

移那斯麻都之事問與不問唯從

勅之因獻高麗奴六口別贈王人

奴一口皆攻爾林也乙未百濟遣中

○日本紀標注卷之十六

○三十五

四字為句と云、此說然るべし、れむ、字を舊の終みして姑、カヘリテとよむべし○王人、も御使あり、莊公六年、經、不王人子突救衛注、不王之微官也、とあり○延那、斯の延を原本、近小作、見、延、誤、あり、上、延、とあり、下、延、又、移、とも、あり、○細字、不、皆、攻、以下、八字、を、後、



亦號前部曰西  
部即消奴部也  
後漢書宋夷傳  
高句麗條云有  
五族有消奴部  
絶奴部云々注  
一曰内部一  
名黃部云々五  
曰西部一名右  
部即消奴部也  
高麗の西部  
又舊稱を用ひ  
し小や○姬氏も怒喇斯致が本姓あり○達率と百濟十六等の中第二等の官  
あり北史百濟傳云達率十三人二品唐書黑齒常傳云達率猶唐刺史○怒喇斯  
致契と二人の名あり次不遣陪臣怒喇斯致と云々を見る小契と今一人の名  
○釋迦佛、翻譯名義集云釋迦文淨名疏云天竺語釋迦為能文為儒義名能儒又

羅王與日本府臣等俱遣使奏狀

聞訖亦宜共任那并心一力猶尚

若茲必蒙上天擁護之福亦賴可

畏天皇之靈也冬十月百濟聖明

王更名遣西部姬氏達率怒喇斯

致契等獻釋迦佛金銅像一軀幡

蓋若干經論若干卷

釋迦牟尼、旃華云此云能仁寂默寂默故不住生死能仁故不住涅槃悲智兼運  
此嘉稱發軫云本起經翻譯為能仁本行經譯牟尼為寂默能仁是姓寂默是字  
云々年治云文も牟尼も字音と仮名との差別のみみて同物なるを譯者其義  
を得ざりしふこそ○金銅も二種ありす二字を合せてカ子とよむべし○像  
もカタとよむ處し舊讀ミカタとよめふも佛辟家の私点あり佛足石歌不弥  
蘇知阿麻利布多都乃加多知と云々を拾遺集もみせりわはは云々つゝの姿  
を不へたるも改め載たす即具三十二相と云々を和げよはふて是もさう相と  
もよまざりて○一軀ハシラとて神の御上より起りて皇子等も云轉せるを  
中昔小至てて三代實錄十一小太政大臣一柱と記し又僧を數るふも然云  
るもつらとむ姑舊讀ふ從ふ○幡蓋和名抄如蓋具小涅槃經云諸香木上懸五色  
幡和名波太又云幢幡寶蓋和名岐沼加散と云々絹傘あり○經論もいりある  
佛經を渡しりむ知ぐとし柳神代悠遠の間もあむらく措て神武天皇元年よ  
て此十三年まで千二百十二年の間佛も法も世も知る人なく潔白不治まり  
來しを此小かゝる異端の雜來て神國を汚し神民を惑まし今より千載を  
經とも廢るべくも見ざる  
もいりある世の惡事をも

難解難入も法  
華經方便品も  
別表讚流通禮拜功德云是法於

見<sup>レ</sup>た<sup>ル</sup>文<sup>ハ</sup>、  
○周公とて、  
名を旦と云<sup>ヒ</sup>、文  
王の子<sup>ニ</sup>して、  
武王の弟<sup>ナリ</sup>あり  
○孔子も、名を  
丘と云<sup>ヒ</sup>、周の靈  
王が世<sup>ニ</sup>、叔梁  
紇と、顔氏の女  
と、野合して生  
たりと、史記の  
世家に記<sup>セ</sup>り、  
此二人を<sup>ハ</sup>支  
那国<sup>ニ</sup>、聖人と  
崇<sup>メ</sup>稱<sup>ス</sup>、○無量  
無邊<sup>ニ</sup>、佛經中  
の常語<sup>ナリ</sup>あり○  
果報<sup>ト</sup>も、善を<sup>ハ</sup>為

諸法中、最<sup>モ</sup>為<sup>ス</sup>殊勝<sup>ニ</sup>、難<sup>シ</sup>解<sup>ル</sup>難<sup>ク</sup>入<sup>リ</sup>、周公  
孔子、尚<sup>モ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>ク</sup>知<sup>ル</sup>、此法能<sup>ク</sup>生<sup>ス</sup>無<sup>レ</sup>量<sup>ノ</sup>無<sup>レ</sup>  
邊<sup>ノ</sup>福<sup>徳</sup>果<sup>報</sup>、乃<sup>チ</sup>至<sup>シ</sup>成<sup>ニ</sup>辨<sup>ハ</sup>無<sup>レ</sup>上<sup>ノ</sup>菩<sup>提</sup>、  
譬<sup>ト</sup>如<sup>シ</sup>人<sup>ノ</sup>懷<sup>キ</sup>隨<sup>ニ</sup>意<sup>ニ</sup>寶<sup>ヲ</sup>逐<sup>レ</sup>所<sup>ニ</sup>須<sup>ニ</sup>用<sup>ハ</sup>盡<sup>ク</sup>依<sup>ル</sup>、  
情<sup>コト</sup>此<sup>ノ</sup>妙<sup>法</sup>、寶<sup>亦</sup>復<sup>シ</sup>然<sup>リ</sup>、祈<sup>ヒ</sup>願<sup>ハ</sup>依<sup>ル</sup>情<sup>ニ</sup>、無<sup>レ</sup>  
所<sup>レ</sup>乏<sup>キ</sup>、且<sup>チ</sup>夫<sup>ノ</sup>遠<sup>ク</sup>自<sup>ラ</sup>天竺<sup>ニ</sup>、爰<sup>ニ</sup>洎<sup>ス</sup>三<sup>ニ</sup>韓<sup>ニ</sup>、依<sup>ル</sup>  
教<sup>ヲ</sup>奉<sup>テ</sup>持<sup>テ</sup>、無<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>尊<sup>ニ</sup>敬<sup>ス</sup>、由<sup>テ</sup>是<sup>ニ</sup>百<sup>ニ</sup>濟<sup>ス</sup>、王<sup>臣</sup>  
明<sup>ク</sup>謹<sup>ニ</sup>遣<sup>テ</sup>陪<sup>臣</sup>、怒<sup>リ</sup>唎<sup>ス</sup>斯<sup>ヲ</sup>致<sup>シ</sup>、奉<sup>テ</sup>傳<sup>ニ</sup>帝<sup>國</sup>、  
流通<sup>ニ</sup>畿<sup>内</sup>、果<sup>テ</sup>佛<sup>ノ</sup>所<sup>レ</sup>記<sup>ス</sup>我<sup>カ</sup>法<sup>ヲ</sup>、東<sup>ニ</sup>流<sup>ス</sup>、

も果を以て報ゆとあり○菩提、翻譯名義集に、肇師云、道之極者、稱曰菩提、秦無  
言以譯之、後人諸師皆譯為道云々、按ふ是法於諸法中、以下四十二字も、金光明  
最勝王經如來壽量品の語を、取捨したるも、彼經にも、是金光明最勝王經、於  
諸經中最為殊勝、難解難入、聲聞獨覺所不能知、此經生無量無邊福德果報、乃至  
成辨無上菩提云々○天竺、日本後紀八に、有一人乘小船、漂著参河国云々、自謂、  
天竺人云々、支那書にも、後漢書桓帝紀、及西域傳に見ゆ、唐書西域傳も、天竺国、  
漢、身毒国也、或曰摩伽陀、曰婆羅門、去京師九千六百里○三韓も、馬韓、辰韓、弁韓  
の、三を合したる名も、今も朝鮮と云、○陪臣も、我朝廷に對したる稱も、史記周  
本紀に、管仲辭曰、陪臣敢辭、注に陪、重也、諸侯之臣、於天子故曰陪臣○帝國も、上  
代我祖国を、海外より帝國と稱し、も諾あり○畿内、説文に、天子千里地、以遠近  
言之、則曰畿、とあり、千里とも支那國虚敷の制も、是も天子の居る近所を云、  
○我法東流も、大般若經功德品に、我滅度已、後時後分、後五百歲、於東北方當廣  
流布云々、年治按ふ此上表百十九字も、恐も推古天皇後、追作たるものも、親  
王是を信じ、百濟王の眞の上表ありむと、ゆへに撰入たる社疑も、しけき  
此表の中、是法於云々と、りるを見ゆべし、抑最勝王經も、唐に翻譯せし物も、  
此天皇の十三年も、梁元帝と云、国王の、兼聖元年も當り、唐の初代より數ても、  
六十五六年前、あれをや是を以て此上表と云、物の偽  
作あるを、知るべし、猶云、べきも、多ふと、略



踊躍、神功紀ニ見ニて、彼ノ如ク注シつ○歴問ニも、上ノ四年、紀ニふも、トナメテトよめ、問トナメ並ニあり、雄略紀ノ舊讀ニトナヘトヒテトよみ、爰ニもトナメトヒテトヨリ、何トもトヨリ、  
○豊秋日本ニ甚略ニたり、豊秋津洲ニ日本トよむべし○中臣連鎌子ニ中臣系譜ニ天兒屋

是日天皇聞已、歡喜踊躍、詔使者云、朕從昔來、未曾得聞如是微妙之法、然朕不自決、乃歷問群臣曰、西蕃獻佛、相貌端嚴、全未曾看、可禮以不、蘇我大臣稻目宿禰奏曰、西蕃諸國一皆禮之、豊秋日本豈獨背也、物部大連尾輿、中臣連鎌子、同奏曰、我國家之王天下者、恒以天地社稷百八十神、春夏秋冬、

根命より、十六代ノ末子、鎌大夫ト云、人見ニ父トを真人、大連ト云、子トを黒田大連トと記シ、鎌大夫より六代ノ孫トを、大職冠鎌足トと記セり、此鎌大夫即、鎌子連ト多クむべし○百八十神トを思フふ、當時神祇官ニ祭スる、官幣ト預ルる、処ノ座數ヲありしニも、委ニ官ト故ニ記セり○祭拜ニ為ス事トとリる、事ニ政事ニて、神トを祭スるニを、政事ノ大本トとシはシあり、孝徳紀ニ先ニ以テ祭ス鎮ニ神祇ト、然後應議政事ト、續紀ニ卅四、勅ニ祭ス神祇ト、國ノ之大典ト、若不誠敬、何以致福ト、云々、禁秘抄ニ允禁中ニ作法ト、先ニ神事ト、後ニ他事ト、且暮敬神ト之、敬慮無懈怠ト、記シ、後ニ人ト、  
○蕃神トとシ佛トをシ、日本靈異記ニ隣國客神トと書キ、客神者佛也トと注シ、晋書ニ會稽文孝王傳ニ佛者清遠玄虛之神トと云、又佛圖傳ニ佛外國之神トと記セり、按ニ此紀ニ虎狼蛇をシ神トと云、名ヲあシりトて、可シ畏ル大御神達ト、等シ並ニ混ズべシりト、世ニ小屠者乞兒トも、人ト多クむトて、穴ヲうシみ、天皇トをシ、おシ並ニ為スばシらシ如シし○致國神之怒ト、續紀ニ卅六、神祇官言ニ伊勢大神官寺ト、先ニ為ス有崇ト、遷建他處ト、而今近、神郡ニ其崇ト未レ止ト、除飯野郡ト之移造便地ト者、許ス之、類聚國史ニ十九、弘仁七年六月、伊勢太神宮司ト從七位下、大中臣朝臣清持ト有犯穢竝ト行佛事ト、神祇官ト卜シ之ニ有崇ト、科ニ大祓解ト、在報賽見任ト、三代實錄ニ卅八、建十市郡百濟大寺ト、子部大神ト在寺近側、舍ニ怨屢燒ト

祭拜為事、方今改拜蕃神、恐致國神之怒

堂塔云々、子部神社也、式社にて、同郡小坐、續紀十九、於東大寺設百高座、講仁王經、是日飄風起、說經不竟、於是四月八日講說、飄風亦發、つるも、神の咎め、始ひしあり、神の佛を忌

惡み、於ふも申も更なり  
小墾田も、允恭  
紀、小墾田宋  
女と見也、推古  
紀、小墾田宮  
と見也、續紀廿  
六、小治、田  
小作も、即大  
和国高市郡ふ  
○為因も、上  
小汝則無資と、  
つる也、小注せり、○向原家為寺、扶桑略記、榎木、原家、辛久木也、つる久、舊趾高

天皇曰、宜付情願人、稻目、宿禰、試  
令禮拜大臣、跪受而忻悦、安置小  
墾田家、勲脩出世業、為因、淨捨向  
原家、為寺、於後國行疫氣、民致大  
殘、久而愈多、不能治療

市郡豐浦村、つる、三代實錄四十二、小太政官下符、大和国司、稱散位、從五位下、宗岳、朝臣、木村等言、建興寺者是先祖、大臣宗我稻目、宿禰之所建也、本緣記文具存、灼然、望請宗岳氏、檢領而、彼寺、別當、傳燈、大法師位、義濟、確執曰、太政官仁壽四

年九月十三日、下當国符、備、彼寺、推古天皇之舊宮也、元號豐浦、故為寺名、凡厥緣起、具存前志、佛法東流、始於此、其田園、奴婁施入之由、勅誓、堅懇、銘之、金盤云々、色葉字類抄、扶桑略記を引、曰、豐浦寺、舒明天皇、御宇、建塔心柱、大炊天皇、但馬国封五千戸、施之、つる、此向原寺を豐浦寺とも、建興寺とも号し、大和志添下郡、條、後移于豐浦村と記せり、即高市郡豐浦村より遷しゆ、又此郡も豐浦村と云、名を存せり、寺をテラとよ、えは、韓語あり、訓蒙字會、テルと注せば、を、圓珠庵雜記、寺を照輝の義と云、るも妄說、○疫氣をエヤミとよめる義を、崇神紀、不注せし、つるども、此疫氣も温疫、つる、瘡瘡、つる、上より疫を令、ま、如く、人毎、病し、つる、同名を傳へ、疫瘡とも云、は、是を痘瘡、あ、しと云、る、確證も、日本記畧、長徳四年七月、條、今月、天下、衆庶、煩、瘡瘡、世号之、稻目瘡、又号、赤、瘡、天下、無、免、此病之者、つる、をみ、は、べし、然、む、疫瘡、も、併、附、さ、渡、來、る、もの、つる、蘇、我、稻、目、が、所、為、より、弘、ま、さ、む、を、稻、目、瘡、の、名、つる、う、も、む、佛、て、よ、の、つる、つる、限、も、此病の根を斷、ま、と、叶、も、さ、る、を、や、猶、敏、達、十、四、年、紀、も、云、べし、○天、殘、も、惡、か、ら、狀、あり、難、波、堀、江、も、集、解、も、大、和、巡、覽、記、を、引、て、云、高、市、郡、豐、浦、寺、東、

物部、大連、尾輿、中臣、連、鎌子、同、奏、  
曰、昔日、不須臣計、致斯病死、今不

飛鳥川、西有難波、堀江、と記せり。此地名大和国にも聞ざり。ど摂津国の難波として、迂遠を強む。此説は從ふべし。○伽藍、翻譯名義集ふ。僧伽藍、譯為衆園。僧史略云、為衆人園圃。園圃、生植之所。佛弟子則生殖道芽聖果也。○天無風雲、災大慶云々、神怒懼るべし。○牛頭云々、地名あり、東国通鑑、百濟始祖十八年、條ふ、百濟王欲襲樂浪牛頭山城、とらる是あり、公事根源ふ、素戔嗚尊の童部、ふて牛頭天王とも、武塔天神とも申あり云々、神代紀ふ素戔嗚尊帥其子五十猛神、降到於新羅國、と、併思ふ、彼尊を牛頭天王と傳稱

遠而復、必當有慶、宜早投弃、懃求後、福、天皇曰、依奏、有司乃以佛像、流、弃、難波、堀江、復、縱、火、於伽藍、燒燼、更無餘、於是天無風雲、忽、災、大、殿、是、歲、百濟、棄、漢城、與、平壤、新羅、因、此、入、居、漢城、今、新羅、之、牛頭、方、尼、彌、方、也。

道芽聖果也。○天無風雲、災大慶云々、神怒懼るべし。○牛頭云々、地名あり、東国通鑑、百濟始祖十八年、條ふ、百濟王欲襲樂浪牛頭山城、とらる是あり、公事根源ふ、素戔嗚尊の童部、ふて牛頭天王とも、武塔天神とも申あり云々、神代紀ふ素戔嗚尊帥其子五十猛神、降到於新羅國、と、併思ふ、彼尊を牛頭天王と傳稱

せり。新羅の地名、因もりと知るべし。○尼彌方、天書に新羅與高麗共、對百濟取漢城平壤、以漢城為牛頭、以平壤為尼彌、とらる、原本細字に地名未詳とらる。後人の所為、あるとむ前。○乙亥、十二年、日、杆率、と、百濟、十六等の官名の中、第五等。○戊寅、十五日、○泉郡、と、和泉国、和泉郡を云、爰、小河内国とらる。未、分置せざりし、前ふとむ。○茅渟、と、神武紀、に注せり。○梵音、と、讀經の聲を云。

十四年春正月、甲子朔、乙亥、百濟遣、上部、德率、科野、次酒、杆率、禮塞、敦等、乞、軍兵、戊寅、百濟、使人、中部、杆率、木、劾、今、敦、河内、部、阿斯比、多、等、罷、歸、夏、五月、戊辰、朔、河内、國、言、泉、郡、茅、渟、海、中、有、梵、音、震、響、若、雷、聲、光、彩、晃、曜、如、日、色、天、皇、心、異、之、遣、溝、邊、直、入、海、求、訪、是、月、溝、邊、直

るふと、梁、高僧  
傳子見延たり、  
朝野群載子、衆  
起座登舞臺、唱  
梵音云々、字書  
小梵、華言淨正

入海、果見樟木、浮海、玲瓏、遂取而  
獻、天皇命畫工造佛像二軀、今吉  
野寺放光樟像也

言寂靜と注せり、按小此紀の撰者、親王も素より佛を信珍ひしゆ、動まむ佛徳  
を稱まはは往々絶ず、此件事を、日本靈異記云、敏達天皇の御世の存と、して、和  
泉国海中、有樂器之音聲、如笛等琴篳篥等聲、或如雷振動、晝鳴、夜、燿、指東而流と  
云々、此書一向の佛作あとど、梵音とも言も、然小此紀小如斯記せはを思  
む、全親王の私小加、たると著し、○溝邊直、通證小崇神紀小、溝、字をウナデと  
よめ子を扱として、姓氏録云、雲梯、連を引出、集解も是を諾ひ、溝邊直と云、と  
ど、借字も注と小ことよと、溝、字を當むこといり、續紀廿三小、雲梯、連廣足、雲  
梯造諸足、同北四小、雲梯、連廣道と見とれ、と、雲梯、連と云、る姓を見と、是と  
溝邊と云、る姓小て、字の儘小上むべし、原本細字小、此但、曰直、不書名字、蓋是傳  
寫、誤夫矣の、十五字云、例小違へとむ刪る、○畫工とりとど、佛工あると、○  
吉野寺、天書小十四年夏五月、神樟、樹淳、茅淳、海、河内守獻之、初造佛像、為毗蘇山  
立寺、日本靈異記云、此件の古傳を記せは小も、今、世安置吉野、比蘇寺、而放光阿

彌陀之像是也とり、三代實錄卅八小、大和国香山、比蘇龍門とり、  
も是り、志小吉野郡池田莊、比曾村一名現光寺、又名吉野寺とり、

内臣、姓氏録小、  
孝元天皇、皇子、  
彦太忍信命之  
後也とり、○  
同船、新撰字鏡  
小、辭、艇、小舟、波  
志布裕、和名抄  
小、海、艇、をよみ、  
夫木集卅三小、  
秋風小、波りせ  
てせと、渡る  
り、ふ、ま、の、浦  
この、ゆ、ま、れ、も  
し、ふ、ぬ、杯、の、を、

六月遣内臣、名、使於百濟、仍賜良  
馬二疋、同船二隻、弓五十張、箭五  
十具、勅云、所請軍者、隨王所須、別  
勅醫博士、易博士、曆博士等、宜依  
番上下、今上件色人、正當相代、年  
月、宜付還使相代、卜書曆本、種種  
藥物、可付送

此同船を皇極紀小、母盧紀舟と注せり、猶彼処云、○醫博士、此醫をク  
スシとよめ子、允恭紀良醫の下小注せり、職員令典藥寮小醫博士一人、掌諸

藥方脉經、教授醫學生等、唐書百官志、醫博士一人、正八品上、助教一人、從九品上、按、我上代、醫博士、てふとく、し、名こそふあり、り、め、其方を習ふ、人、の、を、教、る、人、り、り、て、神代、より、傳、來、り、む、を、此、百濟、ふ、し、も、依、り、し、も、彼、國、の、を、希、し、と、か、も、ゆ、し、て、あり、次、あ、れ、も、お、あ、じ、○、易、博、士、も、職、員、令、ふ、陰、陽、博、士、一、人、と、り、て、易、を、も、兼、たり、然、し、皇、國、ふ、も、神、代、より、太、占、の、神、ト、傳、り、つ、れ、む、彼、易、て、ふ、拙、劣、の、物、を、用、る、べ、き、ふ、あ、る、ね、ど、例、の、我、も、異、あ、る、を、珍、し、み、り、ひ、て、あり、○、曆、博、士、職、員、令、ふ、曆、博、士、一、人、掌、造、曆、及、教、曆、生、等、云、々、唐、六、典、保、章、正、の、注、ふ、至、階、置、曆、博、士、一、人、長、安、四、年、省、曆、博、士、置、保、章、正、以、當、之、と、り、り、保、章、正、の、注、と、も、周、禮、春、官、子、見、と、り、初、皇、國、ふ、も、上、代、より、皇、曆、を、以、正、朔、を、定、め、日、月、の、旋、轉、四、時、の、運、行、少、も、差、ひ、し、を、聞、ず、其、も、古、書、子、見、と、り、初、る、日、を、朔、日、と、し、て、月、の、盈、を、推、べ、し、故、思、ふ、ふ、立、春、の、日、を、歲、首、と、し、月、の、見、と、り、初、る、日、を、朔、日、と、し、て、月、の、盈、を、配、し、と、見、と、り、初、る、日、を、朔、日、と、し、立、春、より、三、百、六、十、五、日、を、十、二、分、ち、衣、更、着、彌、生、ふ、ど、の、名、を、配、し、と、見、と、り、初、る、日、を、朔、日、と、し、立、春、より、月、尾、の、間、を、一、月、と、し、立、春、近、月、を、正、月、と、云、し、ゆ、し、を、知、る、傍、し、白、虎、通、ふ、夏、以、孟、春、月、為、正、殷、以、季、冬、月、為、正、周、以、仲、冬、月、為、正、と、記、し、秦、漢、ふ、至、り、孟、冬、を、歲、首、と、為、し、み、宋、書、曆、志、子、見、と、り、漢、武、帝、ふ、至、り、孟、春、不、定、た、り、ゆ、し、其、本、紀、子、見、と、り、然、し、此、紀、子、干、支、を、逆、し、操、上、漢、曆、不、作、合、た、る、も、孝、德、天、皇、の、御、世、の、所、為、ふ、や、○、今、上、件、の、今、を、令、ふ、誤、り、り、件、も、ク、ダ、リ、と、よ、む、べ、し、行、あり、○、曆、本、通、證、ふ、曆、の、名、義、を、日、讀、也、と、云、し、實、ふ、日、を、カ、

とも、キ、セ、も、ケ、とも、コ、とも、云、し、を、此、説、當、り、り、又、同、書、ふ、本、を、事、手、本、物、乃、多、米、之、相、通、と、云、り、

甲子四月○樟  
 勾宮大和国高  
 市郡ふ、勾と云  
 地名なり、樟と  
 考、え、ず、○、王、辰  
 爾を、ワシニと  
 了める王を姓  
 みて、辰爾も名  
 あり、其も敏達紀、勤、乎、辰、爾、懿、哉、辰、爾、と、宣、ひ、續、紀、四、十、仁、德、天、皇、以、辰、孫、王、  
 長子、太阿郎王、為、近、侍、太阿郎王、子、亥、陽、君、亥、陽、君、子、午、定、君、生、三、男、長、子、味、沙、仲  
 子、辰、尔、季、子、麻、呂、從、此、而、別、始、為、三、姓、と、り、る、を、思、ふ、ふ、午、定、君、以、上、ふ、世、數、を、落  
 せる、ふ、や、姓、氏、録、ふ、王、高、麗、人、從、五、位、下、王、仲、文、之、後、也、と、り、る、王、仲、文、と、文、武、天  
 皇、の、御、世、の、人、ふ、て、續、紀、二、ふ、勅、僧、東、樓、還、俗、復、本、姓、東、樓、姓、王、名、中、文、云、々、と、有、  
 て、次、ふ、授、王、仲、文、從、五、位、下、ふ、ど、見、ゆ、る、○、船、長、職、員、令、ふ、主、船、司、正、一、人、掌、公  
 私、舟、楫、及、舟、具、事、○、船、史、姓、氏、録、ふ、船、連、菅、野、朝、臣、同、祖、太、阿、郎、王、三、世、孫、智、仁、君  
 之、後、也、と、り、る、菅、野、朝、臣、も、同、書、ふ、百、濟、國、都、慕、王、之、後、と、り、る、猶、三、代、實、錄、卅、二

我大臣稻目宿禰奉勅遣王辰爾  
 數ニ録船賦即以王辰爾為船長因  
 賜姓為船史今船連之先也

ふも、此氏人の姓祖を記せり、天  
武十二年、紀ふ、船史賜姓曰連

丁酉七月○下  
部因德、按み、下  
部も百濟の方  
名めて、因德を  
因德の誤り、百  
濟官名も、因德  
あり、爰も新羅  
とらるゝ如何  
若、行と休つ考  
ふ法し○内臣  
も、東国通鑑、百  
濟古爾王二十  
七年條も、置内  
臣佐平掌宣納  
事○德率も、第  
四等の官あり

八月辛卯朔丁酉、百濟遣上部奈  
率科野、新羅下部因德、汝休帶山  
等、上表曰、去年臣等同議、遣内臣  
德率、次酒、任那大夫等、奏海表、諸  
彌移居之事、伏待恩詔、如春草之  
仰、甘雨也、今年忽聞、新羅與狗國  
通謀、云、百濟與任那、頻詣日本、意  
謂、是乞軍兵、伐我國、歟、事若實者

噬臍、莊公六年、  
左傳も、若不早  
圖、後君噬臍、注  
も、若、蓄腹齊、喻  
不可及

國之敗亡、可企踵而待、庶先日本、  
兵未發之間、伐取安羅、絶日本路、  
其謀若是、臣等聞茲、深懷危懼、即  
遣疾使、輕舟馳表、以聞、伏願天慈、  
速遣前軍、後軍相續、來救、逮于秋、  
節、以固海表、彌移居也、若遲晚者、  
噬臍無及矣、所遣軍衆、來到、臣國、  
衣糧之費、臣當充給、來到、任那、亦  
復如是、若不堪給、臣必助充、令無



多利加氣之吻也。と有り、是をミカヘと訓る義もあらす。○挿鏡、訓義詳ふら、圖書式佛器中、鏡四口と見色、喪葬令の義解、鏡者如鈴無舌、有柄執、鳴之而止、擊鼓也。と有り、和名抄、小鏡一名鏡、俗云常古と有り、と、鉦鼓の字音あり、俗ふドラと云、物まら、近衛式

旗充滿、會明、有着頸鎧者一騎、挿鏡者二騎、珥豹尾者二騎、并五騎、連轡到來、問曰、少兒等言、於吾野中、客人有在、何得不迎禮也、今欲早知、與吾可以禮、問答者、姓名、年位、餘昌對曰、姓是同姓、位是杆率、年二十九矣、百濟反、問亦如前、法而對答焉、遂乃立標而合戰、於是百濟以鉞刺墮高麗勇士於馬、斬

小、征鼓をトラとよめ、原本細字、小鏡、字未詳の四字を、叙紀、不當削去と有り、と、諾あり、○豹尾、和名抄、小豹、似虎而圓、文者也、日本紀私記云、奈賀豆可美と注せ、即中津神、虎狼の間と云、意ふ、珥、珥、挿あり、原本豹を狗、誤と有り、今叙紀、小、標、を、表、ふ、お、じ、と、あ、り、○標、を、表、ふ、お、じ、と、あ、り、○偏將、も、百濟、の、あ、り、甲午七日、○淳中倉太珠敷尊、敏達天皇、く、○丙申九日、○曰、佐、も、姓、氏、録、小見、と、て、譯、語

首、仍、刺、擧、頭、於、鉞、末、還、入、示、衆、高麗軍將、憤怒、益甚、是時、百濟、歡叫之聲、可裂、天地、復、其、偏將、打鼓、疾闘、追却、高麗王、於、東聖山、之上、十五年春正月、戊子朔甲午、立皇子、淳中倉太珠敷尊、爲皇太子、丙申、百濟遣中部木劔、施德文次、前



と云、即通事  
○閏月四日、  
是も十四年十  
一月あり、初閏  
月を蜻蛉日記  
中み、年毎ふり  
られむらうら  
君がとめらる  
ふ月をむ、かく  
あやろるらむ、  
古今六帖み、  
るふ月さ、  
て、行、と年  
ふも云々、然  
ど姑、後月とよ  
みつ○臣等云  
云の七字、後入  
の所為ありと

部施徳曰、佐分屋等、於筑紫、諮内  
臣佐伯、連等、曰、徳率次酒、杆率塞  
敦等、内臣等者謂、以、去年閏月四日、  
到來云、臣等以、今年正月、到如此  
導而未審來不也、又軍、數幾何願、  
聞、若干、預治營壁、別諮、方聞奉、可  
畏、天皇之詔、來詣筑紫、看送賜軍、  
聞之歡喜、無能比者、此年之役、甚  
危於前、願遣賜軍、使逮正月、於是

思へど、姑く原  
本不あぐぐふ

内、臣奉、勅、而答報曰、即令遣助軍  
數、一千、馬、一百、足、船、四十、隻、二月  
百濟、遣下部、杆率、將軍、三貴、上部  
奈率、物部、烏等、乞救、兵、仍、貢、徳率  
東城子、莫古、代前、番、奈率、東城子  
言、五經、博士、王柳貴、代、固徳馬丁  
安、僧曇惠、等九人、代、僧道深、等七  
人、別奉、勅、貢、易、博士、施徳王道良、  
曆、博士、固徳王保孫、醫、博士、奈率

採藥師、職員令  
典藥寮、藥園

○日本紀標注卷之十六

○四十七

師二人、掌知藥性色目、種採藥園諸草、及教藥園生。○樂人、職員令雅樂寮、百濟樂師四人、樂生二十人、乃、四人を横笛師、篳篥師、莫目師、儻師ありと、類聚國史百七、大同四年、條不見とたり、皇國ふも古より、古樂を傳、異あを希み、ひし、亦と、上ふ云、るが如し、樂人、下原本施、字を脱せり、歎紀不、撰て補ふ。○李德、北史百濟傳、第十等の官、にて、青帶と記せり。○對德、同十一等の官、にて、黃帶と記せり。

王有悛陀、採藥師、施德潘量豐、固德丁有陀、樂人施德三斤、李德己麻次、李德進奴、對德進陀、皆依請代之。

戊子三日、○斯羅、東國通鑑、新羅智證王四年、條、新羅始定國號、云々、或稱斯羅、或稱斯盧、三月丁亥朔、百濟使人、中部木菟、施德文次等罷歸、夏五月丙戌朔、戊子、内臣率舟師、詣于百濟、冬十

或稱新羅、梁書諸夷傳、新羅者、其先本辰韓種也、云々、魏時曰、新盧、宋時曰、新羅、或曰、斯羅、隋書新羅傳、新羅國在高麗東南、居漢時、樂浪之地、或稱斯羅、○有至臣、叙紀、私記曰、案假名本、作内臣、とあり、○東方領物部、是を百濟の東方を領たり、ふて、物部と其氏人、彼地

二月、百濟遣下部杆率汝斯干奴、上表曰、百濟王臣明、及在安羅諸倭臣等、任那諸國、旱岐等奏、以斯羅無道、不畏天皇、與狗同心、欲殘滅海北、彌移居臣等共議、遣有至臣等、仰乞軍士、征伐斯羅、而天皇遣有至臣、帥軍、以六月至來、臣等深用歡喜、以十二月九日、遣攻斯羅、臣先遣東方領物部莫哥武連、

の女を娶て、生  
たる子を云、ち  
り○函山城、集  
解、小東国通鑑  
み、見、延、た、る、管  
山城を引當た  
り○筑紫物部、  
雄略紀、筑紫  
聞、物部、大、斧、手  
と云、人、見、ゆ、○  
火、箭、を、箭、ふ、火  
を、附、て、敵、陣、を  
焼、せ、云、此、術、久  
しく、絶、え、を、保  
元中、木、曾、義、仲  
が、法、住、寺、殿、を  
攻、る、時、其、臣、今  
井、兼、平、が、火、箭

領<sup>井テ</sup>其<sup>カ</sup>方<sup>ヲ</sup>軍士<sup>ヲ</sup>攻<sup>ル</sup>函山<sup>サシ</sup>城<sup>ヲ</sup>有<sup>リ</sup>至<sup>ル</sup>臣<sup>ガ</sup>所<sup>ニ</sup>  
將<sup>シ</sup>來<sup>ル</sup>民<sup>ヲ</sup>筑紫<sup>ノ</sup>物部<sup>ノ</sup>莫<sup>ク</sup>奇<sup>ニ</sup>委<sup>ス</sup>沙奇<sup>ノ</sup>能<sup>ハ</sup>  
射<sup>シ</sup>火<sup>ヲ</sup>箭<sup>ヲ</sup>蒙<sup>テ</sup>天<sup>ノ</sup>皇<sup>ヲ</sup>威<sup>シ</sup>靈<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>月<sup>ノ</sup>九<sup>日</sup>酉<sup>ニ</sup>  
時<sup>ニ</sup>焚<sup>キ</sup>城<sup>ヲ</sup>拔<sup>キ</sup>之<sup>ヲ</sup>故<sup>ニ</sup>遣<sup>ヒ</sup>單<sup>ト</sup>使<sup>ヲ</sup>馳<sup>セ</sup>船<sup>ヲ</sup>奏<sup>シ</sup>聞<sup>ク</sup>  
別<sup>ニ</sup>奏<sup>シ</sup>若<sup>シ</sup>但<sup>シ</sup>斯<sup>ノ</sup>羅<sup>者</sup>有<sup>リ</sup>至<sup>ル</sup>臣<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>將<sup>シ</sup>軍<sup>ヲ</sup>  
士<sup>ニ</sup>亦<sup>ク</sup>可<sup>ク</sup>足<sup>ル</sup>矣<sup>ナリ</sup>今<sup>ハ</sup>狛<sup>ト</sup>與<sup>テ</sup>斯<sup>ノ</sup>羅<sup>者</sup>同<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>戮<sup>ス</sup>  
力<sup>ヲ</sup>難<sup>ク</sup>可<sup>ク</sup>成<sup>ル</sup>功<sup>ヲ</sup>伏<sup>シ</sup>願<sup>ヒ</sup>速<sup>ニ</sup>遣<sup>ヒ</sup>竹<sup>ノ</sup>斯<sup>ノ</sup>嶋<sup>上</sup>  
諸<sup>ノ</sup>軍<sup>士</sup>來<sup>リ</sup>助<sup>ケ</sup>臣<sup>ノ</sup>國<sup>ヲ</sup>又<sup>ク</sup>助<sup>ケ</sup>任<sup>シ</sup>那<sup>ノ</sup>則<sup>シ</sup>事<sup>ヲ</sup>  
可<sup>ク</sup>成<sup>ル</sup>

を射し後、往々聞ゆ○竹斯嶋上の竹斯を筑紫にて嶋を筑前国志摩郡を云、  
北史九十四、皇国のことを云、ち條子、東至一支、國又至竹斯、國又魏志三十三、斯  
馬、國と見、延、た、る、志  
摩、郡、を、上、を、考、え、ず  
草、船、を、單、船、の  
誤、お、れ、べ、し、○  
船、能、叙、紀、私  
記、曰、案、假、名、本、  
作、織、麩、王、篇  
云、毛、為、席、是、を  
アリカモしよ  
め、る、を、万、葉、十  
四、子、安、利、伎、奴、  
同、十、六、子、織、衣、  
み、ど、ろ、ろ、アリ  
と、お、お、じ、く、美  
し、き、狀、を、云、マ  
と、聞、ゆ、康、頼、木

又<sup>テ</sup>奏<sup>ス</sup>臣<sup>ト</sup>別<sup>ニ</sup>遣<sup>ヒ</sup>軍<sup>士</sup>萬<sup>人</sup>助<sup>ケ</sup>任<sup>シ</sup>那<sup>ノ</sup>并<sup>シ</sup>  
以<sup>テ</sup>奏<sup>シ</sup>聞<sup>ク</sup>今<sup>ハ</sup>事<sup>ヲ</sup>方<sup>ニ</sup>急<sup>ニ</sup>草<sup>船</sup>遣<sup>ヒ</sup>奏<sup>シ</sup>但<sup>シ</sup>奉<sup>ル</sup>  
好<sup>キ</sup>錦<sup>二</sup>足<sup>一</sup>船<sup>能</sup>一<sup>ト</sup>領<sup>シ</sup>斧<sup>三</sup>百<sup>口</sup>及<sup>シ</sup>  
所<sup>ヲ</sup>獲<sup>テ</sup>城<sup>ノ</sup>民<sup>ノ</sup>男<sup>二</sup>女<sup>五</sup>輕<sup>薄</sup>追<sup>テ</sup>用<sup>テ</sup>悚<sup>シ</sup>  
懼<sup>ル</sup>餘<sup>昌</sup>謀<sup>レ</sup>伐<sup>ニ</sup>新<sup>羅</sup>耆<sup>老</sup>諫<sup>テ</sup>曰<sup>ク</sup>天<sup>ノ</sup>未<sup>ダ</sup>  
與<sup>ハ</sup>懼<sup>ル</sup>禍<sup>ノ</sup>及<sup>ス</sup>餘<sup>昌</sup>曰<sup>ク</sup>老<sup>矣</sup>何<sup>ノ</sup>怯<sup>也</sup>我<sup>ハ</sup>  
事<sup>ニ</sup>大<sup>國</sup>有<sup>リ</sup>何<sup>ノ</sup>懼<sup>也</sup>遂<sup>ニ</sup>入<sup>リ</sup>新<sup>羅</sup>國<sup>ヲ</sup>築<sup>ク</sup>

草小羚羊を加  
未之々として注せ  
て、是て麋羊て  
ふ獸ふて、此皮  
と毛席ふより  
ゆゑ、羚羊あり  
ぬ毛皮をも惣  
てカモと云ふ  
らへるゆゑ、麋  
毳ふもかゝる  
訓もらるるあり  
新撰字鏡ふ、毳  
又統を、加毛と  
注せ、後漢書  
西域傳ふ、有細  
布、好毳毼と、  
る注ふも、毛席也と、  
み此下疑、有脱文と、  
云、ら如く、此儘ふと  
讀え、ぐと、し、○大  
國、北史ふ皇國のこ

久陀牟羅塞其父明王憂慮餘昌  
長苦行陳久廢眠食父慈多闕子  
孝希成乃自往迎慰勞新羅聞明  
王親來悉發國中兵斷道擊破是  
時新羅謂佐知村飼馬奴苦都  
智曰苦都賤奴也明王名主也今  
使賤奴殺名主冀傳後世莫忘於  
口

とを記せる條ふ、新羅百濟皆以  
倭為大國○暇食ふ見とた  
已卯廿七日○  
延首受斬岩垣  
松苗曰百濟王  
聖明深淵惑佛  
說尊信不自禁  
遂至獻佛像於  
天朝而是後為  
新羅所攻失其  
土地自為之擒  
深泣被斬彼所  
謂福德果報者  
果何在、意と云  
る如く、實ふ佛  
ふ淫、新羅の  
ためふ、賊殺せ  
らとせし、何の

已卯苦都乃獲明王再拜曰請斬  
王首明王對曰王頭不合受奴手  
苦都曰我國法違背所盟雖曰國  
王當受奴手  
令明主仰天大息涕泣許諾曰寡  
人每念常痛入骨髓顧計不可苟  
活乃延首受斬苦都斬首而殺掘  
坎而埋  
一本云、新羅葬埋明王、頭、  
骨、而、以、禮、送、餘、骨、於、百、濟、

因縁あらむ、笑今新羅王、埋明王、骨、於北、  
 不<sub>レ</sub>慮<sub>レ</sub>し○廳和廳階、下、名此<sub>レ</sub>廳曰都堂、  
 名抄<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>廳延賓屋也、和名萬豆利古止止乃と注せり、政殿あり、是をマンドコロ  
 とし、マンドコロとも云<sub>レ</sub>、初上、件<sub>レ</sub>のこ<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>東国通鑑、百濟聖王三十二年、條<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>詳  
 あ<sub>レ</sub>○惶駭、新撰字鏡<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>惶急を阿和豆と注せ<sub>レ</sub>、惶を原本不<sub>レ</sub>違<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>誤<sub>レ</sub>まり、集解<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>改<sub>レ</sub>たる、  
 不<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>ふ○筑紫國造、孝元紀<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>注し<sub>レ</sub>つ○占擬、新撰字鏡<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>擬、  
 万加奈不<sub>レ</sub>と注し<sub>レ</sub>雄略紀<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>寫<sub>レ</sub>、馬と<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>、占<sub>レ</sub>七<sub>レ</sub>目<sub>レ</sub>指<sub>レ</sub>をい  
 及<sub>レ</sub>諸將等、得<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>間道逃歸、餘昌讚  
 雨、彌屬<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>懈、射却圍軍、由<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>餘昌  
 橋<sub>レ</sub>及其<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>甲領會也、復續<sub>レ</sub>發箭如  
 勇壯者、發<sub>レ</sub>箭之利、通<sub>レ</sub>所乘<sub>レ</sub>鞍、前後  
 進<sub>レ</sub>而彎<sub>レ</sub>弓、占<sub>レ</sub>擬<sub>レ</sub>射落<sub>レ</sub>新羅、騎卒最  
 駭、不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>所圖、有<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>射人、筑紫國造、  
 進而彎<sub>レ</sub>弓、占<sub>レ</sub>擬<sub>レ</sub>射落<sub>レ</sub>新羅、騎卒最  
 勇壯者、發<sub>レ</sub>箭之利、通<sub>レ</sub>所乘<sub>レ</sub>鞍、前後  
 橋<sub>レ</sub>及其<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>甲領會也、復續<sub>レ</sub>發箭如  
 雨、彌屬<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>懈、射却圍軍、由<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>餘昌  
 及<sub>レ</sub>諸將等、得<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>間道逃歸、餘昌讚

不<sub>レ</sub>○鞍前後橋、雄略紀<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>鞍、瓦後橋と、<sub>レ</sub>るをむ<sub>レ</sub>へ見る、  
 公十一年、左傳、不<sub>レ</sub>衣有<sub>レ</sub>繪、帶有<sub>レ</sub>結、注<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>繪、領會也と<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>○鞍、橋君、和名抄<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>、鞍橋を久良保、  
 不<sub>レ</sub>柱<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>どの<sub>レ</sub>ダ<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>て、鞍橋を射貫<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>を、讚<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>あり、原本<sub>レ</sub>賦<sub>レ</sub>を、  
 賦<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>誤<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>り、此<sub>レ</sub>賦<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>二<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>よ<sub>レ</sub>め<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>む、紀中<sub>レ</sub>チ<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>仮<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>ある<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>や  
 王子惠、東国通鑑、威德王四十五年、條<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>百濟、  
 王昌薨、謚<sub>レ</sub>曰<sub>レ</sub>威、  
 十六年春二月、百濟王子餘昌、遣<sub>レ</sub>  
 王子惠、德王子惠者、威奏<sub>レ</sub>曰<sub>レ</sub>、聖明王  
 國造、射却圍軍、尊而名曰鞍橋君、  
 於是新羅將等、具知<sub>レ</sub>百  
 濟、疲盡、遂欲謀滅<sub>レ</sub>無餘、有<sub>レ</sub>一將云  
 不可<sub>レ</sub>日本、天皇以<sub>レ</sub>任那事、屢責<sub>レ</sub>吾  
 國、况復謀滅<sub>レ</sub>百濟、官家必招<sub>レ</sub>後、患  
 故止<sub>レ</sub>之

德、第二子李明  
立、二年、薨、諡曰  
惠長、とあり、是  
あり○王子惠  
云々十字も、集  
解、私記の攬  
入として、刪と  
ど、今從せず  
○為、賊見殺、下  
ふ、十五年為新  
羅處殺、故今奏  
之とあり、十二  
字も、私記、攬入  
として、集解、不  
削、是、不從、ふ  
○為、當、万葉一  
ふ、為、當、也、今、夜  
毛、我、獨、宿、牟、同

為、賊、見殺、天皇聞、而傷恨、迺遣使  
者、迎、津慰問、於是許勢、臣問、王子  
惠曰、為、當、欲、留、此、間、為、當、欲、向、木  
郷、惠答曰、依、憑、天皇、之、德、冀、報、考  
王、之、讎、若、垂、哀、憐、多、賜、兵、革、雪、垢  
復、讎、臣、之、願、也、臣、之、去、留、敢、不、唯  
命、是、從、俄、而、蘇、我、臣、問、訊、曰、聖、王  
妙、達、天、道、地、理、名、流、四、表、八、方、意  
謂、永、保、安、寧、統、領、海、西、蕃、國、千、年

六、小、當、不、相、將  
有○眇、然、通、證  
小、眇、當、作、渺、と  
云、○昇、遐、を、  
ワ、カ、レ、と、よ、え  
る、と、死、る、を、云、  
古今、小、瀬、を、せ  
け、を、淵、と、あり  
て、も、よ、し、み、け  
る、別、と、を、と、ひ  
る、と、ぐ、ら、み、ぢ、る、と、文、選、西、征、賦、に、武、皇、忽、其、外、遐、云、々、是、を、禮、記、曲、禮、に、登、假、と  
云、假、も、遐、ゆ、か、あ、し、博、物、志、に、秦、之、西、有、義、渠、國、親、戚、死、聚、柴、積、而、焚、之、勳、之、即、烟  
上、謂、之、登、遐、と、云、る、一、説、ふ、て、登、遐、を、靈、の、遐、登、る、を、云、○與、水、無、歸、古、今  
小、先、た、ち、ぬ、く、の、ヤ、ち、と、ひ、ふ、あ、し、み、と、あ、つ、け、水、の、か、へ、來、ぬ、く  
大、泊、瀬、之、世、も、  
雄、略、天、皇、二、十  
年、紀、小、見、を、た  
る、○蘇、我、卿、も

萬、歲、奉、事、天、皇、豈、圖、一、旦、眇、然、昇  
遐、與、永、無、歸、即、安、玄、室、何、痛、之、酷  
何、悲、之、哀、凡、在、含、情、誰、不、傷、憚、當  
復、何、咎、致、茲、禍、也、今、復、何、術、用、鎮  
國、家  
計、何、况、禍、福、所、倚、國、家、存、亡、者、乎、

名を洩せり、同族ふがら稻目が類みちらげ

草木言語え、神代紀不見也

○造立国家之神え、大汝少

彦名の二神、其名と文徳實

録、齊衡三年十月紀不見也

○脩理神宮云々、按子神威

の畏さを知らず、蘇我氏の黨

蘇我卿曰、昔在天皇大泊瀬之世、汝國爲高麗所逼、危甚累卵、於是

天皇命神祇伯、敬受策於神祇、祝

者迺託神語、報曰、屈請建邦之神、

往救將亡之主、必當國家謚靖人

物入安、由是請神往救、所以社稷

安寧、原夫建邦神者、天地割判之

代、草木言語之時、自天降來、造立

國家之神也、頃聞汝國、輟而不祀、

ふも稀ある人あり

○壬午四月○白猪屯倉

敏達紀不遺蘇我馬子、大臣於

吉備國、增益白猪屯倉與田部

即以田部名籍云々、續紀廿七

不美作國人從八位下、白猪臣大足賜姓大庭臣、同廿九、不美作國大庭郡人、外正八位下、白猪臣

證人等四人、賜姓大庭臣、不、併按、不、爰、不、吉備國、白猪屯倉と云々、美作國、不、と知るべし、其、和銅六年、割備前國六郡、始、置、美作國、と、續紀六、不、見、正、九、れ、と、あり

出家と、僧と、不、るを云、皇國古

來か、い、るもの、ふ、う、り、し、ゆ、云、

方今、悛悔前過、脩理神宮、奉祭神、

靈國可昌盛、汝當莫忘、秋七月己

卯朔、壬午、遣蘇我大臣、稻目、宿禰、

穗積、磐弓、臣等、使于吉備、五郡、置

白猪屯倉

八月、百濟、餘昌、謂臣等曰、少子、今願奉爲考王、出家脩道、諸臣百姓

當べき訓あく、故イヘテ、  
ホツシ、  
よ、  
の、  
か、  
心、  
社、  
親、  
る、  
此、  
を、  
と、  
や

報言、今君王欲得出家脩道者且  
奉教也、嗟夫前慮不定、後有大患  
誰之過歟、夫百濟國者、高麗新羅  
之所爭、欲滅自始、開國迄、于是歲  
今此國宗、將授何國、要須道理分  
明、應教、縱使能用耆老之言、豈至  
於此、請悛前過、無勞出俗、如欲果  
願、須度國民、餘昌對曰、諾、即就圖  
於臣下、臣下遂用相議、爲度百人

蕃磨直、景行紀  
播磨別、見  
たて、  
姓、  
小、  
日、  
命、  
紀、  
見、  
○、  
の、  
へ、  
原、  
ふ、  
○、  
兒、

多造幡蓋種種功德云云  
十七年、春正月、百濟王子惠請罷  
仍賜兵仗良馬、甚多亦頻賞祿衆  
所欽歎、於是遣阿倍臣佐伯連、播  
磨直率筑紫國舟師、衛送達國、別  
遣筑紫大君、百濟木記云、筑紫  
勇士一千、衛送彌氏、津名、因令守  
津路要害之地焉、秋七月甲戌朔  
巳卯、遣蘇我大臣稻目宿禰等、於

○日本紀標注卷之十六

○五十四



和名抄云、同郡  
郷名、三家、美也  
和名、葛城山田  
直、大和志忍海

備前兒嶋郡、置屯倉、以葛城山田、  
直瑞子爲田令、  
陀豆歌毗

郡小山田村、忍海、葛上葛下、二郡の間、  
あり、む、田令も田使あり、續紀四十、  
八、備前国津高郡人、正七位上田使首良男、  
是も官田を掌らしむるゆゑ、田令と云、  
韓人大身狹、是も韓人を田部として、屯倉の

冬十月、遣蘇我大臣稻目宿禰等、  
於倭國高市郡、置韓人大身狹屯

倉、高麗人小身狹屯倉、紀國置海

部屯倉、一本云、以處處、韓人爲大

麗人身狹屯倉、田部、是即、以韓人、高

麗人身狹屯倉、田部、故因爲屯倉、之號也

十八年春三月、庚子朔、百濟王子  
餘昌嗣立、是爲威德王、

二十一年、秋九月、新羅遣彌至已

知奈末、獻調賦、饗賜、邁常、奈末喜

歡而罷、曰、調賦使者、國家之所貴、

重而私議之所、輕賤行李者、百姓

之所懸命、而選用之所、卑下王政

之弊、未必不由此也、請差良家子、

寡君、注、行人

也、とら、

及伐于、隋書新羅傳、其官有十七等、と記して、第九等を及伏于、不作で、東國通鑑、新羅儒理王九年、條、第九曰、級伐、食不作で、互相誤る、此紀、不記せ、此を正とすべし。○司賓、を玄蕃寮の官人を云、和名抄、を玄蕃寮、保守之萬良比止乃

爲使者、不可以下、昇賤爲使、

二十二年、新羅遣久禮叱、及伐于、

貢調賦、司賓饗遇、禮數減常、及伐

于、忿恨而罷、是歲復遣奴氏、大舍

獻前、調賦於難波、大郡、次序諸蕃

掌客、額田部、連葛城、直等、使列于

百濟之下、而引導、大舍怒、還、不入

館舍、乘船、歸至穴門、於是脩治穴

門、館大舍問曰、爲誰客、造工匠、河

豆加佐と云、即法師、賓客司

ふて、賓客と云、希人の轉あり、

職員令玄蕃寮、頭一人、掌佛

寺、僧尼、名籍、蕃客、辞見、饗饗送

丙、馬飼首、押勝、欺、給曰、遣問西方、無禮、使者之所停宿處也、大舍還、國、告其所言、故新羅築城於阿羅、波斯山、以備日本

迎、及在京、夷狄、監當館舍事、義解、凡諸蕃入朝者、始自入城、終于辞見、饗饗送迎、等皆惣主と云、如し、此寮、小佛寺僧尼を雜掌を侍、佛、胡國の物多、ゆゑ、加、た、ち、あり。○大舍、を、新羅第十二等の官、を、記、す、と、隋書、及、東國通鑑、不見、也、たり。○難波大郡、を、オホガタと云、むべし、其例、を、中臣官處、氏本系帳、に、浪速國大縣之味原里と云、て、同家牒、に、於、保阿賀多と云、を、孝德紀、に、幸大郡、宮、舒明紀、に、改、脩、理、難波大郡、及、三韓館、續紀、十七、小遷御大郡、宮、皇極紀、に、遣諸大夫、於難波、檢高麗國所貢金銀等、并其獻物、使人、貢獻、と云、を、思ふ、ふ、古郡、字、を、コホリと云、み、し、とも、思、は、ぬ、む、必、ア、ガ、タ、の、上、略、と、して、大郡、を、オホガタと讀べし、攝津志、に、高津宮の一名と記せ、本系帳、に、照して、據、り、げ、あり。○掌客、を、蕃人來朝の時、は、ち、ち、ふ、人、を、云、即、玄蕃寮、附屬の官人、あり、治部式、に、凡蕃客入

朝者、著掌客二人とつる是あり○額田部神代紀に注せり○穴門館和名抄子、  
長門国豊浦郡郷名室津、無呂都と注せり○工匠和名抄子、木工を古多久美と  
注せれど、雄略紀の哥子、陀俱彌とつるに依る○馬飼首繼體紀に見る  
たり○備日本、原本備を脩子誤り、今通證集解等不改、たると従ふ

古嵯神功紀、  
登古沙山共居  
磐石上、とつる  
○此地り○散  
半下、上、散  
半、下、作、り  
○西羌、字書、不  
羌、西、戎、牧、羊、人  
也○詔曰以下、  
二百五十字許、  
て、梁書王僧辯、  
傳、子、より、て、作、  
出、た、る、あり○  
毒、古、事、記、中、卷

二十三年春正月、新羅打滅任那、  
官家一本云、二十一年、任那滅焉、  
國、斯、二、岐、國、多、羅、國、卒、麻、國、古、嵯、  
國、子、他、國、散、半、下、國、乞、食、國、稔、禮、  
十國、合、夏六月詔曰、新羅、西、羌、小、醜、  
逆天無狀、違我恩義、破我官家、毒  
害我黎民、誅殘我郡縣、我氣長足  
姬尊靈聖聰明、周行天下、劬勞群

小、神、倭、伊、波、禮  
毘、古、命、倭、忽、為  
遠、延、及、御、軍、皆  
遠、延、而、伏、と、  
る、遠、延、ふ、お、ふ  
じ、

庶饗育萬民、哀新羅所窮見歸、全  
新羅王將戮之首、授新羅要害之  
地、崇新羅非次之榮、我氣長足、姬  
尊於新羅、何薄我百姓於新羅、何  
怨而新羅長戟強弩、凌威任那、距  
牙鈎爪、殘虐含靈、剗肝斲趾、不厭  
其快、曝骨焚屍、不謂其酷、任那族  
姓、百姓以還、窮力極殫、既屠且膾、  
豈有率土之賓、謂為王臣、乍食人

跌莩、繼體紀  
見とたり

鞍韉、和名抄子  
韉之太久良、公  
任集、みちの  
くみの守、實方

之、禾、飲、人、之、水、孰、忍、聞、此、而、不、憚、  
心、况、乎、太、子、大、臣、處、跌、莩、之、親、泣、  
血、銜、冤、寄、當、蕃、屏、之、任、摩、頂、至、踵、  
之、恩、世、受、前、朝、之、德、身、當、後、代、之、  
位、而、不、能、瀝、瞻、抽、腸、共、誅、奸、逆、雪、  
天、地、之、痛、酷、報、君、父、之、仇、讎、則、死、  
有、恨、臣、子、之、道、不、成、是、月、或、有、譖、  
馬、飼、首、歌、依、曰、歌、依、之、妻、逢、臣、讚、  
岐、鞍、韉、有、異、既、而、熟、視、皇、后、御、鞍、

くだるふ、あ、  
くらやるとて、  
東路の木の去  
たくらふ、見、  
行、都の月を  
あひざらめや  
是、俗、不、切  
付、と、云、もの、  
○讚岐、大  
和、国、廣、瀬、郡、の  
地名、○既、而、原  
本、熟、而、不、作、と  
了、通、證、集、解、等  
み、改、た、る、み、從  
ふ、○延、尉、和、名  
抄、み、獄、を、比、度  
夜、注、し、因、獄  
司、を、比、止、夜、乃

也、即、收、延、尉、鞫、問、極、切、馬、飼、首、歌、  
依、乃、揚、言、誓、曰、虛、也、非、實、若、是、實、  
者、必、被、天、灾、遂、因、苦、問、伏、地、而、死、  
死、未、經、時、急、灾、於、殿、延、尉、收、縛、其、  
子、守、石、與、中、瀬、冰、將、投、火、中、呪、曰、  
非、吾、手、投、呪、訖、欲、投、火、守、石、之、母、  
祈、請、曰、投、兒、火、裏、大、灾、果、臻、請、付、  
祝、人、使、作、神、奴、乃、依、母、請、許、没、神、  
奴、

官と注せり、職原抄檢非違使條、正佐為廷尉之例、邂逅也と記し、次官の佐の唐名あり、晋書職官志に、廷尉主刑法獄訟云々○其子も、歌依の子二人あり、其父宛死とも云、ど、大殿を焼たる罪よりてあり、細字に守石名瀬氷、皆名也の八字、又火中下、投火為刑、蓋古之制也の注の九字も、後人の加たるを削つ○呪、神武紀に注せ々○非吾手投も、廷尉の手して投るふも、つとど、公の御依ありと云、意不て、報應を懼て、此呪ら々○神奴、續紀廿一、常陸国鹿嶋神奴、二百十八人、便為神戶、是も神社に役るも此みて、姓も同書十八、攝津国住吉郡人、神奴意支奈と云、人見ゆ、是も住吉神社に役としが、おのづから姓とありたるも、同三十五、紀伊国名草郡人、外少初位下、神奴百繼と云、人見ゆ、是も同郡日前、神社に役せられじま、と、上におおるじ

遣使も是月の朔より來朝せし、  
秋七月己巳朔、新羅遣使、獻調賦、

其使人知新羅滅任那、恥背國恩、不敢請罷、遂留不歸本土、例同國家百姓、今河内國夏荒郡、鷓鴣野、良良の訓注、  
良良の訓注、  
○鷓鴣野、

邑新羅人之先也

今失せて聞さず○新羅人之先也と裔也と、  
先也と裔也と、  
子孫どもの為、先也とぞ、次は十一月の條、同二十六年五月の條も、おまじ、  
狀に記せ、准て心へべし○  
哆利と、任那の地名ありこと、  
繼體紀に見えたり、彼地は在留の人を、副將小遙拜せしむや○河邊臣、姓氏録に、河邊朝臣、武内宿禰四世孫、宗我宿禰之後也と、  
天武十三年紀、  
大兵尋屬敗亡、乞降歸附、紀男麻呂、出哆利、副將河邊、臣瓊岳、出居曾山、而欲問新羅、攻任那之狀、遂到任那、以薦集部、首登弭、遣於百濟、約束軍、計登弭、仍宿妻、家落印書、弓箭於路、新羅具知軍、計卒起、大兵尋屬敗亡、乞降歸附、紀男麻呂

小河邊臣賜姓  
曰朝臣○薦集  
部首も、姓氏録  
小薦集造小作  
天津彦根命  
之後也とり  
天武十二年、紀  
小薦集造賜姓  
曰連○勝不忘  
敗以下、吳志孫  
權傳の文を、少  
易たるあり

呂宿禰取勝、旋師入百濟營、令軍  
中曰、夫勝不忘敗、安心慮危、古之  
善教也、今處疆畔、豺狼交接、而可  
輕忽、不思變難哉、况復平安之世、  
刀劍不離於身、蓋君子之武備不  
以己、宜深警戒、務崇斯令、士卒皆  
委心而服事焉、河邊臣瓊缶、獨進  
轉鬪所向皆拔、新羅更舉白旗、投  
兵降首、河邊臣瓊缶、元不曉兵對

久須尼自利也  
新羅語不也  
詳ふらむ、細字  
小此新羅語未  
詳也とり、例  
みよりて削る  
○相欺る、河邊  
臣が軍事小、拙

舉白旗空、示獨進、新羅鬪將曰、將  
軍河邊、臣今欲降矣、乃進軍逆戰、  
盡銳、進攻、破之、前鋒所傷甚衆、倭  
國造手彦、自知難救、棄軍遁逃、新  
羅鬪將、手持鈎戟、追至城、洳、運、戟、  
擊之、手彦因騎駿馬、超渡城、洳、僅  
以身免、鬪將臨城、洳、而歎曰、久須  
尼自利、於是河邊、臣遂引兵退、急  
營於野、於是士卒盡相欺蔑、莫有

〇妾、和名抄  
 小、妾、非正嫡、和  
 名乎、無奈、女、安  
 康、紀、小、苜、菜、也  
 了、み、字、鏡、集、類  
 聚、名、義、抄、等、み  
 フ、ウ、ナ、メ、と、注  
 せ、る、と、音、便、讀  
 あり、〇、調、吉、士  
 繼、體、紀、小、見、と  
 たり

遵承、闕將自就、營中、悉生、虜河邊、  
 臣瓊、击等、及其隨婦、于時、父子夫  
 婦、不能相恤、闕將問、河邊、臣曰、汝  
 命、與婦孰、與尤愛、答曰、何愛、一女、  
 以取禍乎、如何、不過命也、遂許、為  
 妾、闕將遂、於露地、奸其婦女、婦女  
 後還、河邊、臣欲就、談之、婦人甚、以  
 慚恨、而不隨、曰、昔君輕賣、妾身、今  
 何面目、以相遇、遂不肯言、是婦人

尻、新撰字鏡、  
 醫、尻、不佐、又尻  
 醫、尻、大、半、良、和  
 名抄、尻、醫、也  
 之、利、俗、云、井、佐  
 比、と、注、せ、り  
 常語、み、も、シ、リ  
 タ、フ、ラ、と、云、マ  
 〇、號、叫、下、叫、吡  
 也、の、細、字、あり  
 例、み、依、り、削、る  
 〇、臍、腫、字、書、み  
 臍、腫、也、腫、尻、也  
 〇、柯、羅、俱、爾、能  
 〇、基、能、陪、佗、陀  
 致、底、と、立、城、邊  
 而、あり、〇、於、譜

者坂本、臣女、曰、甘美、媛、同時、所虜、  
 調吉士、伊企、難、為、久、勇、烈、終、不、降、  
 服、新羅、闕將、拔、刀、欲、斬、逼、而、脫、禪、  
 追、令、以、尻、醫、向、日本、大、號、叫、曰、日  
 本、將、齧、我、臍、腫、即、號、叫、曰、新羅、王  
 陷、我、臍、腫、雖、被、苦、逼、尚、如、前、叫、由  
 是、見、殺、其、子、舅、子、亦、抱、其、父、而、死、  
 伊企、難、辭、旨、難、奪、皆、如、此、由、此、特  
 為、諸、將、帥、所、痛、惜、其、妻、大、葉、子、亦

磨故幡も、大葉  
子者より○比  
例甫囉須母も、  
領巾振の物言  
みて、母も助辞  
あり、和名抄み  
領巾、婦人頂上、  
鈔也、日本紀私  
記云、比礼、北山  
抄内宴、條小陪  
膳、女藏人、比礼  
料、羅事、注、小舊  
例仰織部司人、別一丈三尺とあり、万葉五小、比礼布、良斯家武、麻都良佐、欲比賣、  
按、上代もあつしき時、領巾もすれ袖もすれ、振りて、古歌もあましく  
見ゆ○耶魔等、陞武岐底も、日本へ向てあり○柯羅俱余能、基能陪徐陀陀志も、  
上におまじ、但、陀陀志も、立の延たるあり○於譜磨故幡も、上におまじ○比礼  
甫囉須弥喻も、領巾振所見の物なり○於譜磨故幡も、上におまじ○比礼  
？○那徐波陞武岐底も、向難波而あり

並見禽愴然而歌曰、柯羅俱爾能、  
基能陪徐陀致底於譜磨故幡比  
例甫囉須母耶魔等陞武岐底或  
有和曰、柯羅俱余能、基能陪徐陀  
陀志於譜磨故幡比禮甫囉須彌  
喻那徐婆陞武岐底

大伴連狭手彦  
も、宣化紀も見  
とたて○恥も、  
貨の異體○七  
織帳詳あらむ、  
試み云む、七色  
の糸もて織た  
る、錦帳もや○  
鐵屋詳あらむ、  
通證も以、鉄所  
造之屋と云る  
も、字も泥みた  
る説あり、集解  
も、今寺中所在、  
置舍利等小寶  
塔之類と云る  
も、附會○媛も  
善かみて、催馬

八月、天皇遣大將軍、大伴連狭手  
彦、領兵數萬、伐于高麗、狹手彦乃  
用百濟計、打破高麗、其王踰牆而  
逃、狹手彦遂乘勝、以入宮、盡得珍  
寶、眊賂七織帳、鐵屋、還來、  
高麗西、高樓上、織帳、  
張於高麗王内寢、以七織帳、奉  
獻於天皇、以甲二領、金飴刀二口、  
銅鏤鐘三口、五色幡二竿、美女媛、  
并其從女、吾田子、送於蘇我稻目、



樂日本紀竟宴  
 歌等不見也  
 宿禰大臣、於是大臣遂納二女、以  
 爲妻、居輕曲殿。鐵屋在長安寺、一  
 年、大伴、  
 狹手彦連、共百濟國、比津留津  
 高麗王陽香、於比津留津。  
 細字、媛名也。  
 高麗王陽香、於比津留津。  
 云、然、とあれど、後人の所為、多、  
 婢をよみて、彼所、注せ、按、不、畏、も、天皇、も、七、織、帳、の、み、獻、て、  
 高市郡の地名あり。○長安寺、扶桑略紀の、此、件、の、細、字、に、長、安、寺、者、在、近、江、國、粟、  
 太郡、多、他、郎、寺、是、也、と、記、し、通、證、も、姓、氏、錄、和、藥、使、主、の、傳、を、引、て、大、和、國、高、市、  
 郡、大、宮、大、寺、あり、と、云、也、此、寺、の、名、と、も、猶、天、武、紀、に、注、へ、し、原、本、細、字、に、是、寺、不、  
 知、在、何、國、の、七、字、あり、と、例、ふ、よ、り、削、る、○十一年と、二十三年の、謬、多、  
 一、説、に、傳、た、れ、を、論、あ、し、○陽、香、東、國、通、鑑、陳、永、定、三、年、を、高、句、麗、王、陽、成、元、年、と、  
 記、し、我、天、皇、の、二十、年、に、當、り、  
 陽、香、も、陽、成、と、も、云、り、む、  
 使人云々、是、も、  
 上の七月、己巳、  
 冬十一月、新羅遣使、獻并貢調賦、

條と、お、あ、し、傳、  
 所、に、記、せ、る、  
 且、貢、調、も、任、那、  
 を、滅、す、  
 の、ま、と、り、  
 盧、詳、ふ、ら、ず、  
 盧、の、誤、り、  
 津、志、鴨、上、郡、  
 山、室、村、  
 畝、原、今、失、て、聞、  
 名、抄、山、城、國、久、  
 世、郡、鄉、名、那、羅、  
 崇、神、紀、に、大、彥、命、到、山、背、國、平、坂、と、り、  
 代、國、相、樂、郡、山、村、と、り、  
 樂、郡、鄉、名、大、狗、下、狗、と、り、  
 三、代、寶、錄、五、小、狹、手、彦、云、々、珠、敷、天、皇、世、還、來、獻、高、麗、之、囚、今、山、城、國、狗、人、是、也、

使人悉知國家憤新羅滅任那不  
 敢請罷恐致刑戮不歸本土例同  
 百姓今攝津國三嶋郡垣盧新羅  
 人之先祖也  
 二十六年夏五月高麗人頭霧唎  
 耶陞等投化於筑紫置山背國今  
 畝原奈羅山村高麗人之先祖也

續紀五、山城國相樂郡狛部宿奈賣、三代實錄川二、山城國相樂郡狛人野宮成ふど、云、人等皆其苗裔あり、猶續紀二十六、相樂郡狛野、今昔物語十四、相樂郡高麗寺あり見ゆ○

或人相食、年治云、皇国よ上代、**轉傍郡穀以相救**、**二十八年、郡國大水飢、或人相食**、

より、人を食ひしを聞かば、然るに此件、如斯記せは、如何と云、撰者漢風を慕ひ、假し偽り作らざるに、然例紀中、姓々り、神武紀、大設牛酒、以勞饗皇師、つら類あり、是れ此年不熟なりとて、漢書元帝紀、大水飢、或人相食、轉傍郡、穀穀以相救、とつらるを、九、抜、盗、書りる中、此御世聊銀錢の聞を、つらと、流通ふ、之、う、し、ゆ、五、錢、了、ふ、を、省、り、る、あり、されど彼れ、實事、ふて、是、れ、虚、文、な、れ、を、弁、べ、し、抑、支、那、國、を、む、り、し、よ、せ、人、を、食、ふ、を、常、と、ま、は、国、風、な、は、ゆ、え、山、年、飢、歳、ま、ら、ざ、と、も、平、生、人、を、殺、し、て、食、物、と、ま、な、は、を、漢、學、者、流、を、其、を、よ、ろ、し、ま、と、と、して、動、を、清、潔、の、皇、風、を、穢、と、多、う、り、彼、孔、子、と、云、聖、人、を、り、子、路、が、死、散、を、指、で、吾、何、忍、食、之、と、孔、子、家、語、及、禮、記、の、檀、弓、に、記、せ、り、又、周、文、王、と、云、し、聖、人、也、其、同、僚、梅、伯、が、死、骸、を、醢、し、て、紂、が、遺、り、し、り、食、を、ひ、と、て、狼、受、と、呂、氏、春、秋、に、見、え、たり、猶、平、人、も、親、を、食、ひ、子、を、食、ひ、し、こ、と、彼、國、史、を、む、じ、め、釋、史、小、説、に、記、せ、は、數、ふ、る、に、違、り、ら、む、か、は、依、は、り、ふ、き、業、を、年、治、云、む、と、も、漢、籍、博、覽、

の徒も、知得べきあり○田部、三十年春正月辛卯朔、詔曰、量置

田部、其來尚矣、年甫十餘、脱籍免、

課者衆、宜遣、**膳津**、**爾**、**之**、**甥**、**也**、**檢**、

定、**白猪**、**田部**、**丁籍**、**夏四月、膳津**、**檢**、

閱、**白猪**、**田部**、**丁者**、**依詔**、**定籍**、**果成**、

田、**戸**、**天皇**、**嘉膳津**、**定籍**、**之功**、**賜姓**、

爲、**白猪**、**史**、**尋拜**、**田**、**令爲**、**瑞子**、**之副**、

戸と田部とを、別て云、とき、田部を屯倉の田を作る人等を云、田戸を田部等が、住む家を云、釈紀に私記曰、案假名本作田部之戸とつらぐ如し○白猪史この姓、姓氏録に淺く、と、續紀八、改、白猪史、氏、賜、葛井連、姓、と、つらて、氏、人、も、同一、白猪、史、骨、同、八、白猪、史、廣、氏、同、廿七、白猪、臣、大、足、賜、姓、大、庭、臣、ふど

見をたゞ、此葛井連、大庭臣も、亦姓氏録に決りしと、三代實録七、河内国丹比郡人葛井連宗之云々、賜姓菅野朝臣、本系出自百濟国貴須也、同九、從五位下蕃良、朝臣豐村云々、賜姓菅野朝臣、本系出自百濟国貴須也、つるを以て、自猪史の姓祖をよまむべし、○田令て、上、訓注、つとど、此ハタラサとよまむ、古今、時鳥の鳴声を、垂の田長と聞とりたる歌ありて、田長と云、古、多とど、カヒとよまむ、つらじ、○瑞子、上、以葛城山田直瑞子、為田令とつら、原本細字、瑞子見上、の四字、  
又、後人の所為、多、つら、削る

し酉二日、泊瀬柴籬宮、大和国城上郡、の称あり、○江渟臣、和名抄、加賀国郡名、江沼、国造本紀、江沼国造、柴垣朝御世、武内宿

三十一年、春三月甲申朔、蘇我大臣稻目、宿禰薨、夏四月甲申朔、乙酉、幸泊瀬柴籬宮、越人江渟臣裙代、詣京、奏曰、高麗使人、辛苦風浪、迷失浦津、任水漂流、忽到著岸、郡

祢、四世孫、志波勝足、凡、定賜、同造、姓氏録、江沼臣、建内宿禰、子、若子宿禰、之後也、氏人、七續、紀世五、江沼臣、麻蘇比、日本後紀十二、江沼臣、小並、若、見、の、○、襦代、色、葉、字、類、抄、平、他、字、類、抄、等、小、襦、を、モ、と、よ、み、和、名、抄、上、曰、襦、下、曰、裳、和、名、毛、万、葉、九、子、玉、襦、須、蘇、延、○、隱、匿、垂、仁、紀、仲、哀、紀、小、匿、を、シ、ナ、メ、と、よ、め、是、才、貢、物、を、奪、を、む、た、め、あり、○、性、命、を、身、命、あり、○、微、猷、を、良、法、あり、文、選、勸、進、表、小、謳、歌

司隱匿、故臣顯奏、詔曰、朕承帝業、若干年、高麗迷路、始到越岸、雖苦漂溺、尚全性命、豈非微猷、廣被至德、魏魏仁化、傍通洪恩、蕩蕩者哉、有司宜於山城國相樂郡起館、淨治、厚相資養、是月乘輿、至自泊瀬柴籬宮、遣東漢氏直糠兒、葛城直難波、迎召高麗使人、

者無不吟詠徽猷張銑グ徽美猷道也と注せり○魏々論語子魏々乎舜禹注不  
 高大猷となり○蕩々論語子蕩々乎民無能名焉注不廣遠之稱と記せり○山  
 城此国名を延暦前の書ふも山背山代ふと書き扶桑略記大化二年條云山  
 居不作り万葉ふも開木代とも書て何とも夜莽之呂とよむべきと仁徳紀の  
 御歌子見るたり是を山城と改たるも拾芥抄云延暦十三年七月改山背為山  
 城日本記略延暦十三年條云詔曰此国山河襟帶自然作城因斯形勢可制新號  
 宜改山背國為山城國となりと此紀を撰る山背の頃山城と書べき理あり  
 是も必後人の誤り不てなりも例も猶りを崇神六年紀云和と書りるも  
 如し初山城をヤマキとよむ是を山城とよめる山背は口剛なるなりて  
 城字不シロの訓もありしをや○相樂郡和名抄云相樂佐加良加と注せり  
 記の中卷圓野比賣を本国に返し給ふ如し到山代國之相樂時取懸樹枝而欲  
 死故號其地謂懸木今云相樂となり初此地に韓人の居をトたるも上不頭霧  
 喇耶陸が來住めるも縁とり  
 ○東漢氏直の氏を行はり  
 道君云紀不私  
 記曰案假名本  
 越郡司道君又  
 曰道君越国郡  
 五月遣膳臣傾子於越饗高麗使  
 傾子此部古大使審知膳臣是皇華  
 舩傾子部古大使審知膳臣是皇華

司之名也とつ  
 年治按不道  
 君を姓ふて名  
 不をつらど續  
 紀廿三云越前  
 国加賀郡少領  
 道公勝石三代  
 實録四十八云  
 加賀国加賀郡  
 大野郷人道今  
 古ふと云人見ゆ和名抄云加賀国石川郡郷名味知式不同郡味知神社越中国  
 射水郡道神社姓氏録云道公大考命孫彦屋主田心命之後也○汝非天皇按不  
 昔を云ふ休ふともなりり垂仁二年紀云意富加羅國王之子云々到于穴門  
 時其国有人名伊都都比古謂臣曰吾則是國王也云々見其為人必知非王とも  
 乃云○到于近  
 江を加賀国よ  
 吉士  
 此氏姓氏録云  
 是月遣許勢臣後與吉士赤鳩發  
 秋七月壬子朔高麗使到于近江  
 是月遣許勢臣後與吉士赤鳩發  
 而前詐余取調入己宜速還之莫  
 煩飾語膳臣聞之使人採索其調  
 具為與之還京復命  
 使乃謂道君曰汝非天皇果如我  
 疑汝既伏拜膳臣倍復足知百姓  
 而前詐余取調入己宜速還之莫  
 煩飾語膳臣聞之使人採索其調  
 具為與之還京復命  
 使乃謂道君曰汝非天皇果如我

渡たれど孝徳  
 紀小吉士長丹  
 賜姓為吳氏と  
 つむむ百濟人  
 の未く○狹々  
 波も近江国滋  
 賀郡の地名小  
 て神功紀小注  
 せり、初船を山  
 小控引てふも  
 此船を難波ふてコト、波河より宇治川を引上り、勢多までの間小、一二の難所  
 ありを引たゆえ、狹々波山小控、とも云々○北山詳ありねど、船を湖水小浮  
 べ、直北塩津ふど小漕行りむ、彼処小山てふ地名をふみ、仁徳紀小近江山、君  
 と云、小見中○高城館、紀小私記曰、案、假名日本紀、作高麗斐乃多知、と云、む  
 高、下小麗、字を脱せり、概、もい、り、あ、る、義、う、ま、ら、ず、○東漢、坂上直の、東と西小對、  
 て、大和を云、漢と漢人の意、姓氏録小、坂上大宿禰、出自後漢靈帝、男延王、按小大  
 和国添上郡小、坂上てふ地名、諸陵式小見とた、後、此地小由、り、は、姓、あ、る、べ、し  
 ○錦部、和名抄小、河内国郡名、錦部、余之古里と注せり、錦織の切あり、氏人も敏

自難波津、控引船於狹狹波山而、  
 裝飾船、乃往迎於近江北山、遂引  
 入山背高城館、則遣東漢坂上直  
 子麻呂、錦部首大石、以為守護、更  
 饗高麗使者於相樂館

達紀小、錦織、推古紀小、錦  
 織首久僧ふど、猶おろり

壬子五日○壬  
 辰十五日○不  
 豫、景行紀、允恭  
 紀等小、不便を  
 よめり○驛馬  
 も、早馬馳の切  
 あり、万葉十四  
 小、須受我禰乃  
 波由馬宇馬夜  
 能云々、鈴之音  
 之驛、厩之あり  
 ○造夫婦も、相  
 睦よとあり○  
 是日を原本是  
 月小誤り、壬  
 辰小崩れ、いし

三十二年、春三月戊申朔壬子、遣  
 坂田耳子郎君、使於新羅、問任那、  
 減由、是月高麗獻物、并表未得呈  
 奏、經歴數旬、占待良日、夏四月戊  
 寅朔壬辰、天皇寢疾不豫、皇太子  
 向外不在、驛馬召到、引入臥内、執  
 其手、詔曰、朕疾甚、以後事屬汝、汝  
 須打新羅、封建任那、更造夫婦、惟

如<sup>クアラ</sup>舊<sup>モトノ</sup>日<sup>ノ</sup>死<sup>シマカルトモ</sup>無<sup>ク</sup>恨<sup>コト</sup>之<sup>コノ</sup>是<sup>コノ</sup>日<sup>ノ</sup>天<sup>ノ</sup>皇<sup>ノ</sup>遂<sup>ニ</sup>崩<sup>ス</sup>  
 于<sup>オホ</sup>内<sup>トノニ</sup>寢<sup>トキニ</sup>時<sup>ミトシ</sup>年<sup>モカリス</sup>若<sup>ク</sup>干<sup>ク</sup>五<sup>ツ</sup>月<sup>ノ</sup>殯<sup>ニ</sup>于<sup>ニ</sup>河<sup>ノ</sup>内<sup>ニ</sup>  
 古<sup>フル</sup>市<sup>イチニ</sup>

十二<sup>ト</sup>と<sup>リ</sup>り<sup>○</sup>古<sup>ノ</sup>市<sup>ノ</sup>郡<sup>ノ</sup>名<sup>アリ</sup>あり<sup>○</sup>殯<sup>ニ</sup>も<sup>、</sup>神<sup>ノ</sup>代<sup>ノ</sup>紀<sup>ニ</sup>注<sup>セリ</sup>案<sup>ニ</sup>崩<sup>ル</sup>御<sup>ト</sup>よ<sup>ク</sup>此<sup>ノ</sup>月<sup>ニ</sup>  
 内<sup>ニ</sup>寢<sup>ニ</sup>坐<sup>ス</sup>奉<sup>ル</sup>了<sup>シ</sup>も<sup>、</sup>殯<sup>ノ</sup>宮<sup>ノ</sup>の<sup>整</sup>も<sup>、</sup>ど<sup>の</sup>も<sup>、</sup>多<sup>ク</sup>あり<sup>、</sup>殯<sup>ノ</sup>宮<sup>ト</sup>も<sup>、</sup>喪<sup>ノ</sup>屋<sup>ニ</sup>も<sup>、</sup>御<sup>ノ</sup>墓<sup>ヲ</sup>を<sup>作</sup>  
 竟<sup>ル</sup>も<sup>、</sup>由<sup>テ</sup>も<sup>、</sup>喪<sup>ノ</sup>屋<sup>ニ</sup>殯<sup>メ</sup>日<sup>ノ</sup>數<sup>ノ</sup>の<sup>長</sup>短<sup>モ</sup>、山<sup>ノ</sup>作<sup>ノ</sup>の<sup>成</sup>不<sup>ル</sup>も<sup>、</sup>古<sup>ノ</sup>喪<sup>ノ</sup>徵<sup>ニ</sup>記<sup>ス</sup>  
 し<sup>○</sup>お<sup>つ</sup>、禮<sup>ヲ</sup>、王<sup>ノ</sup>制<sup>ニ</sup>、天<sup>ノ</sup>子<sup>、</sup>七<sup>日</sup>而<sup>殯</sup>、七<sup>月</sup>而<sup>葬</sup>、諸<sup>ノ</sup>侯<sup>、</sup>五<sup>日</sup>而<sup>殯</sup>、五<sup>月</sup>而<sup>葬</sup>、と<sup>云</sup>、  
 虚<sup>ノ</sup>數<sup>ヲ</sup>を<sup>饒</sup>立<sup>タ</sup>る<sup>ノ</sup>の<sup>み</sup>み<sup>テ</sup>、事<sup>ノ</sup>實<sup>ニ</sup>お<sup>り</sup>ら<sup>ず</sup>、然<sup>レ</sup>も<sup>、</sup>彼<sup>ノ</sup>  
 を<sup>規</sup>矩<sup>ト</sup>として<sup>、</sup>我<sup>ノ</sup>古<sup>ノ</sup>を<sup>論</sup>ふ<sup>も</sup>の<sup>り</sup>も<sup>、</sup>愚<sup>ノ</sup>の<sup>極</sup>あり<sup>、</sup>

秋<sup>ニ</sup>八<sup>ツ</sup>月<sup>ノ</sup>丙<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>朔<sup>、</sup>新<sup>ノ</sup>羅<sup>ノ</sup>遣<sup>ニ</sup>弔<sup>ヲ</sup>使<sup>ニ</sup>未<sup>ニ</sup>叱<sup>シ</sup>  
 子<sup>ヲ</sup>失<sup>テ</sup>消<sup>ス</sup>等<sup>ヲ</sup>奉<sup>ル</sup>哀<sup>ヲ</sup>於<sup>ニ</sup>殯<sup>ニ</sup>是<sup>ノ</sup>月<sup>ニ</sup>未<sup>ニ</sup>叱<sup>シ</sup>子<sup>ヲ</sup>  
 失<sup>テ</sup>消<sup>ス</sup>等<sup>ヲ</sup>罷<sup>マ</sup>九<sup>ツ</sup>月<sup>ノ</sup>葬<sup>ニ</sup>于<sup>ニ</sup>檜<sup>ノ</sup>隈<sup>ノ</sup>坂<sup>ノ</sup>合<sup>ノ</sup>陵<sup>ニ</sup>

通<sup>ヒ</sup>子<sup>ヲ</sup>を<sup>泣</sup>き<sup>、</sup>万<sup>ノ</sup>葉<sup>ニ</sup>三<sup>ニ</sup>哭<sup>キ</sup>耳<sup>ヲ</sup>曾<sup>テ</sup>吾<sup>ノ</sup>泣<sup>ク</sup>云<sup>々</sup>同<sup>ニ</sup>十五<sup>ニ</sup>、祿<sup>ノ</sup>能<sup>テ</sup>未<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>曾<sup>テ</sup>奈<sup>ク</sup>久<sup>ク</sup>○檜<sup>ノ</sup>隈<sup>ノ</sup>  
 坂<sup>ノ</sup>合<sup>ノ</sup>陵<sup>ノ</sup>諸<sup>ノ</sup>陵<sup>ノ</sup>式<sup>ニ</sup>、在<sup>リ</sup>大<sup>ノ</sup>和<sup>ノ</sup>国<sup>ノ</sup>高<sup>ノ</sup>市<sup>ノ</sup>郡<sup>ノ</sup>北<sup>ノ</sup>域<sup>ノ</sup>東<sup>ノ</sup>西<sup>ノ</sup>四<sup>ノ</sup>町<sup>ノ</sup>南<sup>ノ</sup>北<sup>ノ</sup>四<sup>ノ</sup>町<sup>ノ</sup>陵<sup>ノ</sup>戸<sup>ノ</sup>五<sup>ノ</sup>烟<sup>ノ</sup>志<sup>ノ</sup>在<sup>リ</sup>平<sup>ノ</sup>  
 田<sup>ノ</sup>村<sup>ノ</sup>俗<sup>ノ</sup>呼<sup>ビ</sup>梅<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>  
 傍<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>翁<sup>ノ</sup>仲<sup>ノ</sup>二<sup>ノ</sup>軀<sup>ノ</sup>



日本紀標注卷之十六

日本...

Main body of faint, illegible text within a rectangular border.

昔四年九月五日

